

第六七号



2020

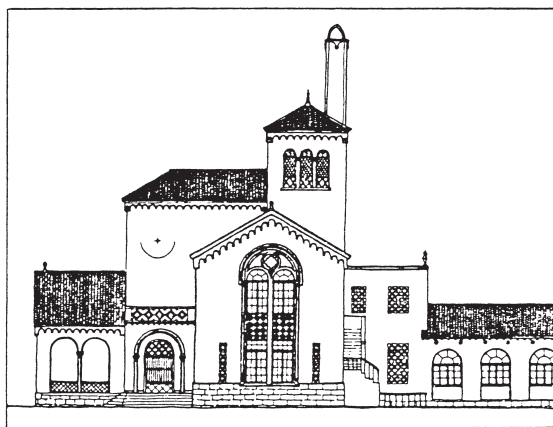
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 六 七 号

2019年4月—2020年3月

も く じ



随想

- 人生を変えた一冊 武田 時昌
- 「おじいさん、ねこ、来たよ」——旧人文研裏の小道 藤井 正人
- 京大人文研での研究生生活を振り返って ジョアン・ジャッツ

講演

- 夏期公開講座 可能性としての子ども／風土記
- 『北白川こども風土記』を中心に 菊地 暁
- 田中逸平『白雲遊記』 大正時代の日本人によるメッカ巡礼の記録
- 中西 竜也
- インド古典が語る理想の「終活」 五木寛之著『林住期』から話を始めて
- 藤井 正人

彙報

- 講演会ポスターギャラリー二〇一九 藤井 正人
- 共同研究の話題 宝塚少女歌劇と京大民俗学会・ワークショップ
- 『帝国日本と少女歌劇』余話 菊地 暁

所のうち・そと

- ゴミを残す 岩城 卓二
- 一〇〇年前の雲岡石窟写真 岡村 秀典
- 律（出家者の生活規則集）は門外不出か 船山 徹
- ある先輩の背中——石立善さんへの誄 福谷 彬
- 「コロナ危機」とコンピュータ機械化資本主義的生産様式の
- 前史の終わりについて クナウト・テイル
- 史語所の概要と私の研究生生活 倉本 尚徳
- 今井漆さんと『天官書』 平岡 隆一
- 書いたもの一覧 58

人生を変えた一冊

武田時昌

今年の二月に共同研究会が主催したイベント終了後の懇親会でのこと、もうお開きという直前に、鍼灸師の某君が超マジメな質問をしてきた。「人生を変える本と出会うには、どうすればいいでしょうか?」。先輩からそのような自慢話をよく聞かされているらしく、羨ましいと思つて読書をしたいが、どうもすんなりといかない。とりわけ、古医書は難しすぎて……と真顔で言う。すでに結婚しているくらいの年齢なのに、真剣に悩んでいて初々しい。

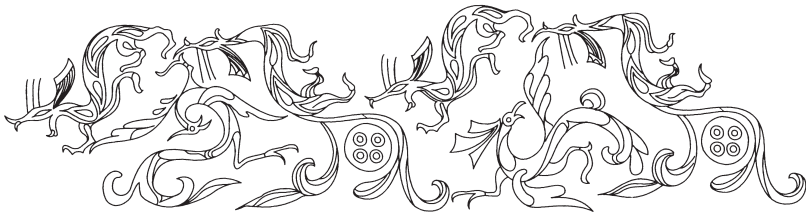
受講生から同じような質問を受けることがたまにある。たいてい朴訥で堅物であるが、マジメな枠に収まりきれない「何か」個性を持っている。だから、ありきたりの模範解答を期待しているわけではない。ちよつと話題をずらして雑談すると、静かな口調で自らの世界を語り出すから面白い。楽しい語らいの後日、彼らが持つてくる愛読書、愛蔵品は、私の宝物になっている。研究室の明け渡し作業で、ずっと未開封になっていた段ボールを開けてみたら、信大生の「提出物」が収めてあった。



国語科K君お勧めの諸星大二郎作品、家庭科有志の尾崎豊追悼ベスト集、国語E受講生のネオンホール・幻のライブビデオなど、いずれも「何を読んだらいいか」「何かに出会いたい」という自発的な問いかけがもたらした珍品である。

鍼灸師の某君の場合には、どういう文脈かは忘れたが、鍼の響きによって脳内モルヒネが分泌するという話題になった。そこで、「医道の日本」の連載コラムで、椎名林檎よりPIERROTの「脳内モルヒネ」が書いて書いたら、読者から「あなたには椎名林檎を聴く資格がない」と猛烈な抗議を受けた体験談を披露した。ところが、反応したのは隣に座っていたH氏のほうで「ウチの妻がそのビジュアル系バンドのめっちゃファンなんですよ」と割り込んできて盛り上がった。すると、不思議そうな顔をして聞き役に徹していた彼は、堰を切ったかのように自分と妻のことを話し始めた。

感銘を受ける読書がしたいと思うきっかけは、どこかで宮沢賢治の詩を見かけたが、さっぱり意味がわからない。そこで本を買って見たがさっぱりで、暗誦してみたと言う。私はすでに出会っているじゃないかと思っただけでも、それを言ったらお終いだから、取りあえず私が青春時代に愛読した中山啓の詩集を薦めておいた。某君は、近々開業するらしいので、お気に入りの賢治詩の一節、名医・良医の決めゼリフを選んで施術室の壁に飾ってほしいとリクエストしておいた。近い将来、彼がどんな診察風景をレポートしてくるかが、楽しみである。



中山啓は、『漢方医学の新研究』を著して昭和前期の漢方復興運動を興起させたジャーナリスト、中山忠直のペンネームである。二種の著作が同一人物によるものと認識されることで、伝統医薬研究に本腰を入れる契機となった。その楽屋裏には、書き切れないほどにいくつもの奇縁があり、中山家を訪問するに至る。ご遺族は、遺品を整理し、戦後に病床でしたためのマッカーサー將軍に宛てた書状の手控えなどを見つけ出した。それをどのような形で公表すればいいか、目下のところ思案中である。思い出の一冊は、やりたいことを数珠つなぎの思考にしてくれるものなのである。

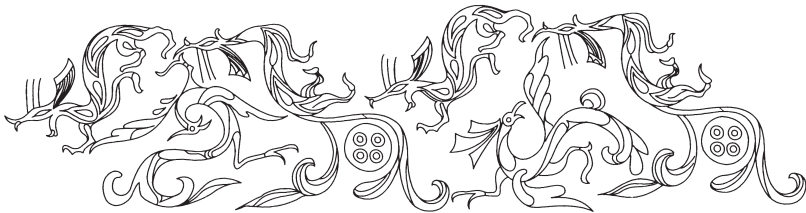
定年に際して研究の軌跡を振り返ってみると、科学と占術が交叉する物語に私を引きずり込んだのは、黄宗羲の『易学象数論』であった。学士入学したばかり夏休みに寝そべって東洋文庫の小野和子訳『清代學術概論』を眺めていると、その書名が目にとまった。翌日、中文出版社に買いにいくと、店主の高畑さんがつこり微笑んだ。そして、落丁で返品されたばかりの『易図明弁』もコピーで補って半額にするから持って行けという。当時の中国書の店主や古書肆の主人には、事情通で剛毅な文化人が少なからずいて、助手や先輩にまさる有益な助言をくれたり、財布が空でも出世払いにしてくれたりしたものである。貧乏学生でもつけの利く本屋がなくなった今日なら、学問の道に進むことはまずなかっただろう。

私の研究が、中国科学思想史とか、術数学とかの未開拓の研



究領域に足を踏み入れたのは、『易学象数論』という不可解な書物を理解したいがためであった。その経緯は、近刊の『術数学の思考』に書いたもので、ここでは繰り返さない。後日談を一つだけ補足しておく、一九九五年に人文研に赴任した折、最初に出会った所員は、小野和子先生であった。研究室が定年退官の小野先生との入れ替わりという光栄なことになったのであるが、数日後に搬入の予定なのに、まだ書架に本がいっぱい並んでいる。三回生の夏休み以来、ずっと敬慕していた先生に初めてお目にかかれた喜びから、荷造りのお手伝いを申し出た。それが、人文研での初仕事となった。

『易学象数論』が指し示す進路は、てんでばらばらな方向を指しており、古今東西の様々な書籍や人物との出会いを演出してくれた。その世界線は常に一つに収束していることが、定年近くになってようやく了解された。数年前の所報に「一にして多、多にして一」という雑文をしたためたが、最終講義では「二」中国的なものを語ってみようと思った。ところが、新型コロナウイルス・パンデミックが襲来して退職記念イベントどころではない騒ぎとなり、突然に命運ゲートが開いて別の時空に弾き飛ばされてしまった。自由気ままな読書生活を満喫させてもらった人文研で、数少ない義務の締めくくりが果たせないのは心残りである。しかしながら、偶発的な出来事にシナリオを書き換える悪癖のある私の自分史においては、最もふさわしい幕引きであったように思う。



「おじいさん、ねこ、来たよ」

— 旧人文研裏の小道

藤井 正人

人文研の本館が大学構内に移転してすでに十年以上の年月がたつが、以前の人文研は大学の外、東一条交差点の北西角にあった。東大路（東山通）に面した建物の裏は、京大の西部構内と医学部構内にはさまれた区域にあたり、そこに比較的小さな民家が密集していた。

一九八七年に井狩彌介先生が始められた共同研究に参加するために、私が住んでいた大阪から人文研に定期的に通うようになった頃は、京阪電車が出町柳まで延長する直前で、四条駅から市バスで東大路を北上して人文研の正面玄関前のバス停で降りていた。頭の中で人文研と東大路が結びついていたので、京阪が出町柳まで延長された後は、今出川通りを百万遍まで歩いたあと東大路を南行して人文研へ通っていた。

一九九三年に人文研に勤務するようになって、しばらくの間はこの行き方を続けていた。やがて百万遍をとおる経路が遠回りになることに気づいてからは、より近い行き方を求めるよ



うになった。いろいろ歩いて見つけ出したのが、出町柳と百万遍の中間のところ。脇道に入り、細い道をたどって人文研の裏にいたる経路である。東大路に抜ける最後の細い道は、小型の自動車も通れないような小道で、両側に小さな民家が並んで建っていた。

その小道を通るようになってすぐに気づいたことは、そこをいろいろな猫が自由に行き来していることである。まるで急ぎの用事でもあるかのように、後ろから来た猫が私を走り抜けていくこともあった。特に猫好きでもなかった私も、次第に通勤時に彼らに出会うのを楽しみするようになった。飼われているのでもない猫が、堂々と民家へ出入りするようすを目にすることもあった。「おじいさん、ねこ、来たよ」といううれしそうな声が聞こえてきたときは、こちらまでうれしい気分になったものである。

この小道は旧人文研の裏口に通じていて、裏口のすぐそばの家は、まさに「ねこ屋敷」と言ってもよいほどに猫の多い家であった。窓から数匹の猫が顔を並べて外を眺めていたり、二階のベランダや屋根で何匹もの猫が朝の日光浴をしているようすが見えた。しばらくして、ベランダ全体にネットがかけられたのは、隣近所の迷惑を考えて、猫がベランダの外へ出ないようにするためだったのであろう。この家について強く心に残っていることは、寒い冬の朝、その家の玄関わきに置かれた小さな戸棚の引き戸が一〇センチほど開けられていて、中に布がしか



れていたことである。寒空の中で家をもたない猫に一時の寢床を与えるためであることは、すぐにわかった。私がこの小道を通い始めたのは、「地域ねこ」という言葉が使われる以前のことであるが、この小道の住民と飼い主をもたない猫たちとの良好な関係を実感することができた。

このような小道も、人文研が本部構内に移転してからは通ることがなくなつた。また私自身、京都に住まいを移して通勤路を変えたこともあつて、この道のこととは記憶から遠のいていつた。ところが、転居した場所での出来事が、旧人文研裏の小道の住民と猫とのことを思い起させることになつた。

私が移り住んだのは、京都の中心部から離れた比叡山の山すそのマンションである。当時、数匹の野良猫がマンションの裏口や駐車場などに住みついてた。この野良猫をめぐつて、マンションの住民の間で深刻ないさかいが生じたのである。何人かの住民が猫に餌をあたえていたが、はじめは表立つた苦情がでることはなかつた。ところが、とつぜん、猫への餌やりを非難する匿名の張り紙がはり出された。餌やりを非難する匿名の張り紙はくり返しはられ、非難の言葉は強くなつていつた。やがて、張り紙の文面は餌やりへの非難を越えて、野良猫の排除を宣言するものとなり、実際に生まれたばかりの野良猫の子どもを近くの山へ捨てにいつたと言いつた出すまになつた。多くの住民たちはこの不気味な張り紙をおそろおそろ見ていたが、ある住民が同じく匿名の張り紙で反撃にでた。同じ子猫かどうか不明だ



が、捨てられた子猫が死んでいる写真のをせ、野良猫の子どもを捨てることの非道さを訴えた。張り紙の応酬はこれ以上は続かなかつたが、しばらくの間とはいえ、マンションの住民の心情が分断されたことは事実である。

野良猫への餌やりを非難することも、野良猫の強制排除の残酷さを訴えることも、どちらも「正論」である。しかし、あまりが具体的な迷惑というよりは不寛容からくる公憤に起因するため、正論がかみ合うこともなく、お互いが背をむけたまままで止まってしまった。その結果、住民の間に生じた分断や不信感がそのまま残されることになった。不幸なことに、その後も同じような意見や感情のぶつかり合いが、別のことでも繰り返された。

裏通りの民家と郊外の大規模マンションでは、住環境や住民の年齢構成が異なる。そのため、住民の野良猫に対する反応が違ってくることも当然である。また、本来、人に飼われるものとして生まれた猫が、いかに地域でかわいがられたとしても、野良猫のまま放置されることはけつして幸せなことではない。しかし、今では一匹の野良猫も見かけなくなってしまうマンションに暮らしていると、マンションそのものには不満はないが、かつて通った旧人文研裏の小道で目にした住民と猫たちとの日常がなつかしく思い出される。



京大人文研での研究生生活を振り返って

ジョアン・ジャツジ

WHOが新型コロナウイルスのパンデミックを宣言したのは、帰国のために京都を離れる直前だった。当初三月初めに講演と学会参加のため行く予定にしていた中国にはじまり、二カ月のうちに日本、韓国、欧州、そして北米へと広がった不安が頂点に達したのである。日本では、当初こそダイヤモンド・プリンセス号での感染拡大が大きな騒ぎになったものの、やがて国外の学会への参加自粛要請や学校の閉鎖などの素早い封じ込め策がとられ、さらにはわたしは京大で参加していた人文研の中国近現代史の研究班のような比較的少人数の会合も中止となった。わたしたちは週末に人混みの多いお寺や神社、繁華街に行くのを控えるようになり、かくて京都での暮らしは一変してしまっ

た。
あつという間に中国国外へと広がったウィルスは、海外へ行くことや海外から来た人への恐怖を引き起こしたわけだが、それは相互の結びつきがどんどんと強くなるこのグローバル化世界への警告のように見える。この三月一九日から二二日にか



て、アジア学会（AAS）はボストンで年次大会を開催する予定で、わたしはその実行委員の一人だった。四千人もの人が参加するこの年次大会を取りやめるべきかどうかをめぐって行われた議論では、世界的な公衆衛生の観点からだけでなく、そもそも二酸化炭素の排出抑制という点からも、遠隔開催をすべきではないか、あるいはそうした方向へ向けて考えを切り替えるべきではないかという意見が提示された。新型コロナウイルスは、学会の開催をバーチャルなものに変えていくという動きを加速させ、バーチャルな会議を支援するのに必要なツールの開発にあたるビジネスを拡大させている。つまり、保健衛生にせよ、環境保護にせよ、そうした考え方はいずれも、ある場所と人と人が対面で研究交流をすることの価値と必要性について、暗に疑問を投げかけているわけである。

こうした感情は理解できるし、今のパンデミックの状況では、あきらかに合理的だろう。けれども、今回半年近く京都にいて確信したのはこれの反対のこと、つまり実際にある場所に身を置いて、長期間にわたり国際的な研究交流をすることのかけがえのない価値である。日ごろとは異なる学術文化の中に身を置き、多様な学術コミュニティで研究報告をし、さまざまな図書館で貴重な資料を収集する、そして学究の場をこえて他の国の文化を体験する。こうした非常に豊かな機会は、そのような交流から生み出されるのである。自分の研究領域である中国近代史に関する人文研の共同研究班に毎週参加することによつ



て、いつでもどこでも読める論文のような直接の研究の成果だけでなく、そのような研究成果がどのようにして姿をあらわすのかをリアルタイムで認識することができた。自分たちとは異なる研究文化のメカニズムをこの目で見ることができたわけである。資料へのアプローチの違い、研究報告へのコメントや批判をするさいのスタイルの違いを目にし、ひるがえって自分自身の資料へのアプローチの仕方や研究プロジェクトの運営方法をより良いものにするヒントを得ることができた。

人文研の研究班では、自分の研究について報告する機会を得られたが、おかげで自分の報告スタイルを京都のそれに合わせるといふ体験ができた。例えば、普段よりも長いペーパーを提出すること、またそのペーパー（報告レジュメ）は事前に提出し、研究班員も事前に読んでおくようになっていたといったことは、北米では普通はやらないことである。また、資料そのものが重視されること、これも——残念ながら——北米ではあまり見られないことである。また同時に、近代中国における普通の人々の読書や日用的な知識という、いま自分が研究していることに関して行った報告では、自分の進めている研究プロジェクトをより大きくとらえるという契機を得ることができた。単に自分のプロジェクトの断片的な成果を示すのではなく、研究班の班員、つまり教養がある一方、専門も様々に異なる聞き手のために、自分の研究の意義をより広く伝えられるようにしなければならなかった。こうしたことを通じて、自分のプロジ



エクトの枠組をより明確にできたこと、それは本当にかげがえのない経験であった。

とはいえ、京都での日々がこうした正規の学術交流にのみあてられていたわけではない。研究班を離れた場でのくだけた議論から得たものも、しばしば同じように貴重だった。研究所のどの人も、わたしが何か聞くと、何でも惜しみなく教えてくれた。自分が知っていることにとどまらず、もっと知るためには何を読めばよいのか、さらにはわたしの研究室に、あるいは役に立つかも知れないといって関連する本をまとめて持ってきてくれる方もいた。数カ月にわたって、こんな風につながりを持ちつつ議論を深め、自分の考えを練り上げ、さらに資料を読むことではじめて可能になることなのだ。

研究班を主宰する一流の研究者たちは、もちろん人文研の財産だが、招かれてやって来る、あるいは訪問にやって来る中国の研究者も貴重な存在である。かれらの研究から学んだものだけでなく、かれらとの交流を通じて中国での研究の付き合いの輪を広げることができた。また、中国でも自分が普段あまり行かないところで行われている研究活動について、さらには自分がやっている領域に非常に近接しているながら、今後数年は刊行されないだろうという博士課程の学生の研究についても知ることができた。

この六カ月は資料収集の面でも充実した時間だった。京大の



図書館群が素晴らしいの言うまでもないが、それだけでなく、世界でもそこにはかないような資料を所蔵する図書館を訪問できたこともうれしかった。例えば国立国会図書館（東京）とその関西館だが、特に関西館は本当に素晴らしい。美しい建物には中国関連の膨大な資料が所蔵され、閲覧も複写も極めて簡単だった。東京の東洋文庫は、これはこれで素晴らしい宝の山である。また、人文研図書室の図書の相互貸し出しには大変にお世話になった。おかげで所蔵元のそれぞれの図書館に行くことなく、日本各地に散在する珍しい資料を利用することができた。

実際に日本に身を置くことで発見できたこともある。ついに長崎に行くことができたのだ。原爆資料館と原爆死没者追悼平和祈念館は、もちろん当然に行くべき場所だが、復元された出島はそれ以上に興味深い場所で、よその博物館ではありえないほど、出島の社会や日本の近代化初期の生活の様子を細かいところまで再現展示していた。中国・日本・オランダにまたがる学術や科学の交流についての展示は、目下わたしが日用の科学の研究プロジェクトに関わっているだけに、特に興味深く参観した。とりわけ、西洋医学を最初に日本に伝えたと言われるドイツの医学者にして植物学者のシーボルト（一七九六―一八六六）の展示は秀逸で、大変によく調べられていた。

また、今回の日本滞在では別のタイプの旅をすることもできた。「芸術の島」と称される直島への旅は忘れられない。ひなびた漁村と大胆な芸術の融合は意外な発見で、安藤忠雄設計の



殺風景ながら心ひかれる建物を見ることによって、光に対する
かれの感覚、外形と本質をつなぎ目なく一体化させるその才能
を知ることによって、わたしの芸術に関する経験はまったく一
新されてしまった。直島美術館群のおびただしいコレクション
は本当にすばらしい。クロード・モネ、デービッド・ホックニ
ー、草間彌生のようによく知られた人の作品もあるが、わたし
が一番心ひかれたのは、柳幸典やなぎゆきのりという知名度はそれほどでな
い概念芸術家が紹介されていたことだった。また、韓国人芸術
家で島に専門の美術館のある李禹煥 (Lee Ufan) もすばらし
かったし、何よりも、小さな集落の民家を芸術展示の場にする
という再利用の手法には感心させられた。

この六カ月はこうした旅、資料、そして学術交流によって、
本当に恵まれた時間となったが、いちばんのお土産は恐らく、
執筆と思索のための場所と時間を持てたことだろう。静かな人
文研のたたずまい、明るくて充分な広さの研究室、朝早くから
夜遅くまで、好きなだけいられる勝手の良さ、こうした諸々
のおかげで、滞在期間を通じて、本当に思考し自分の考えを深め
ることができた。その勢いをカナダに持ち帰ろう、そう思った。
パンデミックは世の終末を思わせる。帰国するや、わたしは
国境の閉鎖だの、公共施設やレストラン、カフェの閉鎖だのと
いった社会全般にわたる隔離体制に暮らすことを余儀なくされ
ている。常態はやがてもどってくるだろうと確信してはいるが、
それはどうがんばっても、今までとは別の常態でしかないだろ



う。この歴史的な転換のさいに、人文研という平穏で清らかな
オアシスで過ごした時間を、わたしはきつといとしく思うに違
いない。

(翻訳 石川 禎浩)



講演



夏期公開講座

可能性としての子ども／風土記

——『北白川子ども風土記』を中心に

菊地 暁

「学校」と「地域」そして「大学」をはじめとする
知のインフラの関係を、〈子ども風土記〉と称される
実践／作品を手がかりに考えてみたい。

〈子ども風土記〉とは、こどもによる、こどもにつ
いての、こどものための風土記といえるが、そのい
ずれに力点が置かれるかは作品によって様々だ。日本民

俗学の創始者・柳田国男による朝日新聞連載（一九四一年四月～五月）をまとめた『子ども風土記』（一九四二年）が最初の作品となるが、「こども」と「風土」というテーマはすぐに後続作品を産み、宝塚による歌劇化（一九四一年）、NHKによるラジオドラマ化（一九四二年）などマルチメディアに展開、さらには時局に乗って「銃後の子供風土記」（一九四三年）「大東亜子ども風土記」（一九四四年）なども刊行される。そして戦後、新制教育の開始、生活綴方の復興とともに多くの〈子ども風土記〉が全国各地に叢生することとなる。

その一つが『北白川子ども風土記』（一九五九年）。

「これはおどろくべき本である」と民族学者・梅棹忠夫が絶賛した同書は、京都市立北白川小学校に通う一九四六年生まれの「戦後の子」四八名の三年間にわたる課外学習の成果をまとめたものだ。大文字の送り火に始まり、遺跡、史跡、年中行事、郷土ゆかりの人物、産業、風俗、都市化の様相などが丁寧に綴られ、興味深い記述が散見される。北部キャンパス今出川通り沿い東端にある「ちいさなおじぞうさんたち」が、キャンパス造成時に出土したもので、粗末に扱って「ばちがあたった」ことから、「名高い湯川博士のおとうさん」すなわち小川琢治によってまつられたものである



34. 5. 8.

大山夫人 大山先生
羽館易先生 本岡 森 鹿三教授

【写真1】『北白川こども風土記』に関わった人々。中央は本岡俊郎さんの父・武（京大農学部教授）

というエピソードもその一つだ（同書七五頁）。

同書には、北白川小でPTA会長も務めた森鹿三が序文を寄せるなど、人文研とも様々な関わりがある。

「石器時代の北白川―小倉町の遺跡―」を書いた本岡俊郎さんは、小倉町遺跡の発見者である羽館易に直接話を聞いて文章をまとめているが、この羽館が戦時中に雲岡石窟調査に活躍した写真家であることは、人文研関係者には言うまでもないことだろう。「写真1」。

依田義賢の脚本による映画『北白川こども風土記』（一九六〇年）にも、分館所屋を訪れる児童たちのカットが収められている。ただ、こうした京都大学との独特の関係が、『北白川こども風土記』の例外視にもつながったのは残念なことだ。北白川小関係者は「あんなのどこやからできたのや」と言われたという。

北白川と人文研の関係は当然ながらその後も続く。

一九六一年に創刊された北白川愛郷会の雑誌『愛郷』には人文研関係者もたびたび寄稿、貝塚茂樹は占領中の一九四九年にロマネスクともスパニッシュとも称される北白川の所屋でイエズス会の式典が催されたことを記している（二三号、一九八二年）。北白川戦没者慰霊の会編・発行『平和の礎』（一九八〇年）には能田忠亮が「戦時を回顧して」を寄稿、海軍水路部の要請で天体曆書を作成する際、近在の女学校卒業生たちが計算

補助業務を担当したことを記している。『人文科学研究所五十年』（一九七九年）にも書かれていないような出来事が、郷土資料に記録されているのが興味深い。

近代日本の学校制度は、すでに一五〇年あまりの歴史を有する。そこに集められた情報と社会関係資本の蓄積は膨大なものであり、『北白川こども風土記』もその一端にはかならない。それらは、学校で学ぶ子どもたちにとって、あるいは、地域で暮らす人々にとって、貴重な財産なのではないだろうか。そしてその財産を未来に活かすためには、学校や地域のみならず、博物館や図書館や文書館や大学といった知のインフラに関わる様々な機関が、適切なネットワークで連携していく必要があるだろう（詳細は、近刊の菊地暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ…北白川こども風土記』から）『小と子社』をご覧いただきたい。

『北白川こども風土記』の児童たちを指導した大山徳夫教諭は、「堅苦しい話になりますけどほんとうの郷土教育というは一口に言って「郷土学習を通して民主主義を学ぶ」ということではないかと思うのです」と述べている（北白川小学校校友会誌『北白川』二七号、一九六一年）。この戦後教育の理想から、およそ六〇年後の私たちは、今、どこにいるのだろうか。あらためて、思い直してみても良い。

田中逸平 『白雲遊記』

——大正時代の日本人によるメッカ巡礼の記録

中西 竜也

『白雲遊記』は、田中逸平という日本人が、大正時代に行ったメッカ巡礼の旅行記である。メッカ巡礼は、ムスリムの義務のひとつで、一生に一回は行うべきものとされる。田中は、大正十三（一九二四）年一月十一日、数えて四十三歳のときに、中国の山東済南でイスラーム教に改宗し、同年三月三十日に済南から、弟子の中国ムスリム青年、馬錦章とともに、メッカ巡礼に旅立った。先行研究によれば、記録上日本人初のムスリムは野田正太郎（一八九一年五月改宗）、最初にメッカ巡礼を行ったのは山岡光太郎（一九〇九年十月改宗、同年十二月巡礼）、そして二番目にメッカ巡礼を行ったのが、田中だといわれる。

『白雲遊記』は、三部から成る。上篇は、田中の旅を、大正十二（一九二三）年十二月十一日の東京出発から説き起こし、済南での改宗と、その後の華北旅行、続くメッカ巡礼の往路の一部、すなわち済南からシン

ガポールまでの旅路を語る。中篇は、シンガポールから海路アラビア半島に向かい、メッカ巡礼遂行の後、シンガポールに帰着するまでの様子を述べる。船旅の苦難や巡礼の過酷さの記述が印象的である。所持金や物価の説明も興味深い。なお、私の計算によると、約一か月のメッカ滞在に要する二人分の旅費を賄うために、田中は、現在の価値にして九十五万円ほどを用意していた（伊藤之雄氏によれば、当時の一円は今の約四千元）。また、これとは別に、シンガポール・メッカ間の往復の船賃約四十万、検疫費七万弱を支払っていた。下篇は、馬錦章と別れて一人シンガポールからヤンゴンを経てインド各地を旅し、ムンバイから済南そして東京へ戻るまでを描く。

大正時代の日本人にとってイスラームは今よりなお縁遠く、日本人ムスリムの数も僅かだった。そんな田中はなぜ改宗を選んだのか。『白雲遊記』の中で、田中は語る。自身は改宗以前から、ムハンマドの果敢な宣教を敬慕し、イスラームと神道の神観の結合を思索してきた。また、十年来、イスラームをふくむ中国の諸問題について文章を書いてきた。その結果、関東大震災（一九二三年）を契機として「神と人生とに対する心眼が開け」、改宗に至った、と。加えて田中は、自らの巡礼の旅を次のように意味づける。それは、

「天之御中主神」はアッラーであるとの信仰にもとづいて世界のムスリムとの精神的結合を謀ることを、「皇国神道の大陸的使命」と信じ、行うに至るまでの道程であった、と。巡礼を経て田中は、神道とイスラーム、およびその他の宗教の根源的同一性への確信を強める。そして、五大宗教（儒、仏、道、キリスト、イスラーム）の帰一、神道におけるそれらの神髓の發揮を「皇道」として推進し、それによってアジアの諸宗教（古道）を復興し、アジアの渾一と興隆を招来する、という、アジア主義的な考えを表明するようになる。

森伸生氏や坪内隆彦氏によれば、田中がそのような発想に達した背景には、中国ムスリムの影響があったという。まったくその通りであろう。田中は、改宗以前から、中国ムスリム学者の思想、なかでも劉智（一七二四年以降没）のそれに関心を寄せ、その漢語著作『天方至聖実録』（預言者ムハンマドの伝記）の邦訳を手掛けてもいた。劉智をはじめ中国ムスリムの学者たちは、イスラームと儒教の同根類似を説き、両者の調和を試みた。田中は、劉智の著作の研究と、少年時代に父から授けられた古神道の修行実践とを経て、神道とイスラームの本質的一致、五教帰一を直観するに至ったという。

ただし、中国ムスリムがイスラームと儒教の相同を示そうとしたのは、自らの存続をかけて、漢人からの異端視・危険視を回避する必要性に迫られてのことであつた。中国ムスリムは、両教の懸隔を前に、イスラームの原型維持と儒教への妥協変容とのあいだでしばしば悩んだ。他方、こうした苦悩は、田中の五教帰一の展望に影を落としていないようだ。彼が、原始仏教から大乘仏教への展開やイスラームの中国化に鑑みて、「皇道」に収斂し得る「大乘的イスラームの樹立」を主張するとき、宗教間の調停において各教の差異をいかに保存するかという、中国ムスリムの課題は、捨象されているように見える。五教帰一の超越的境地を体験的に把握した田中の宗教間融和の方法論は、現象界で喘いだ彼らの思想営為を丸ごと引き継ぐものではなかつたと思われる。

主要参考文献

伊藤之雄『日本の歴史22 政党政治と天皇』講談社、二〇一〇。

拓殖大学創立百年史編纂室『田中逸平——イスラーム日本の先駆』拓殖大学、二〇〇二。

同『田中逸平 その3——日本論／日本ムスリムから見た神道』拓殖大学、二〇〇三。

田中逸平『イスラーム巡礼白雲遊記』論創社、二〇〇四。

田中逸平研究会『近代日本のイスラーム認識——ムスリム田中逸平の軌跡から』自由社、二〇〇九。

Misawa, Nobuo, and Göknuur Akçadağ. "The first Japanese Muslim, Shōtaro Noda (1868-1904)." 日本中東学会年報 23 (2007): 85-109.

インド古典が語る理想の「終活」

——五木寛之著『林住期』から話を始めて

藤井正人

十年あまり前、立ち寄った書店で『林住期』という書名の本が目にとまった。そのときは、古代インドの「林住期」（「林住者」として生きる期間）という言葉と著者の作家との結びつきを意外に思っただけで、手に取って読むことはなかった。かつて人文研で古代インドの法典の共同研究に参加し、法典の説く理想的な人生の後半部にあたる「林住者」の箇所を担当したことがあった。「林住者」に関係する資料を法典だけでなく、時代的にかさなる叙事詩などからも集めて、その背景と実態の解明に取り組んだ。「林住者」については、その後もずっと関心をもっていた。書店で『林住期』という本を目にしたとき、あえて読む気にならなかったのは、研究者としての（幾分かたくな）自負の気持ちがあったからかもしれない。

定年退職の年、久しぶりに夏期講座を担当することになった。長年の間、研究成果を抱え込んでいた「林

住者」についてまとまった話をする最後のよい機会だと思つた。「名作再読」という夏期講座の統一タイトルに半ば強引に合わせるために、かつて目にとまった本から話を始めることにした。

予想どおり、この本はインドのことを書いたものではなかった。古代のインド人の「林住期」という考え方をヒントに、現代人の人生後半における生き方について述べたものであり、人生後半を積極的に生きるための応援歌もしくは決意表明のような内容になっている。古代インドに、人生を学生期、家住期、林住期、遊行期の四つの時期に分けるという考えがあったことを紹介したあと、人生を飛行機の飛翔にたとえ、「林住期」こそが人生において離陸をするクライマックスであり、その前の「学生期」と「家住期」はそのための助走（滑走）だという。「林住期は離陸である」という著者の言葉は、「林住者」の原語である「ヴァーナプラスタ」の意味を、偶然にせよ、部分的に言い当てている。その語は文字通りには「森林（ヴァーナ）に立出する（プラスタ）者」を意味している。ただし、インドの古典に語られる「林住者」が向かう先は、社会を離れた森の奥であり、そこには死にいたる厳しい苦行の日々が待っている。

歴史的に「林住者」には次のような背景がある。古

代インドのヴェーダ時代末、生死が繰り返され、輪廻思想が広まるにしたがって、祭式によって得られるとされてきた天上での生命が永遠でないことが意識されるようになった。そのことはやがて、当時の社会において価値と権威の中心であった祭式と祭司階層に対する信頼がゆらぐ事態につながった。それとともに、社会や家庭を中心とするヴェーダの価値観に對立するものとして、社会や家庭から出て苦行を行う出家苦行主義が台頭してきた。この思潮はやがて新たな宗教運動へ展開し、仏教などの出家苦行型の新宗教が成立した。一方、ヴェーダの側でも出家苦行の要素を取り込むことが、ヴェーダ時代末からポスト・ヴェーダ期にかけて行われた。出家苦行を受け入れながらも、社会の基盤である家庭生活をゆるがすことのない方策として、有名な「アーシユラマ説」が編み出された。「アーシユラマ」という語は「修行の場」を意味しているが、比喩的に「つとめ励む生き方」として用いられている。理想的な生き方として、四つの「つとめ励む生き方」、すなわち梵行者（学生）、家住者、林住者、遍歴者の生き方が提唱された。学習と家庭生活というヴェーダ本来の生き方に、出家苦行にたずさわる二つの生き方があらたに加えられたのである。

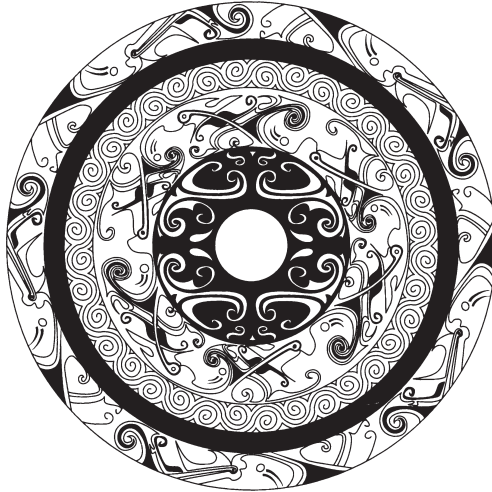
初期の法文献であるダルマ・スートラ（法經）は、

学業を終えた成人に對して、右の四つの生き方をその後の人生の選択肢としてあげている。ただし、家庭生活を営み、子孫を残す家住者をもっとも正しい生き方とされ、その他は容認されているにすぎない。次の時代のダルマ・シャーストラ（法典）では、四つの生き方は選択するものではなく、人生の各段階における生き方として連続するものと再解釈される。四つの生き方が選択から段階へ解釈しなおされることによって、林住者や遍歴者のような出家苦行の生き方が、一人の人間の理想的な人生設計の中に確実に組み入れられることになった。ただ、法典などで提示されている生き方は、あくまでも理念的に構想されたものであり、現実社会の実態を忠実に反映したものではない。しかし、それでもなお、第三の生き方である「林住者」については、資料の範囲を叙事詩などの他の文献にまで拡大することによって、理念の背後にある実態にせまることが可能である。

「ヴァーナプラスタ（林住者）」は、叙事詩などににおける用例を詳細に検討すると、もともとは山林苦行者（あるいはその特定集団）の呼称であったことがわかる。山林苦行者にはさまざまなタイプがあり、タイプによっては、妻や祭火を伴っていたようである。「林住者」の妻や祭火の規定は、それを踏襲したものであ

り、第四の生き方の「遍歴者」には見られない特徴である。「遍歴者」の生き方が仏教の出家者の生き方に近似していることから、林住者と遍歴者とは、異なる社会的および宗教的背景をもつ出家集団に由来することが推定される。

古代インドでは、苦行者のつどう山林（いわゆる苦行林）が伝統的に人々の脱社会への志向を受け入れる場として機能していた。そのことが、山林苦行者の呼称の一つであった「ヴァーナプラスタ（林住者）」が、第三の生き方の名称として採用された背景にある。樹皮の衣をまとい、根や果実のみを食すなどの山林苦行者の生活様式が、過酷な苦行を含めて、当時の人々の出世間への願望に具体的な（ただしステレオタイプ的）イメージを与え、それがそのまま法典などの「林住者」の規定に採り入れられたものと思われる。



2019年6月28日(金) 18:00~
近世日本に書かれた神

神学教団の思想についての考察

講師：ピエール・エマヌエル・ロウ (仏学・現代思想) 京都府立総合政策大学 総合政策学系 教授

日本人神学という異文化圏の神学思想の歴史と現在、そしてその思想的・社会的背景について、神学教団の思想についての考察。神学教団の思想の歴史と現在、そしてその思想的・社会的背景について、神学教団の思想についての考察。

会場：京都大学人文科学研究所 セミナー1

お問い合わせ先
京都府立総合政策大学 総合政策学系 教授
piere@kpu.ac.jp

講演会
イヴァン・ジャボトカ
『私にないから祖父母の歴史も書く』
Conférence d'Ivan Jablonka - Histoire de grands-parents que je n'ai pas eus

講演者：イヴァン・ジャボトカ 京都府立総合政策大学 総合政策学系 教授
Ivan Jablonka (1978) 1982年〜1985年、フランスで文学を専攻。2017年、博士号取得。2019年、京都府立総合政策大学で、(元)講師。

会場：アンナ・マリ・アリーヌ追悼記念会 講義ホール
160-8302, Kyoto, Japan
〒617-8501 京都府京都市伏見区南宇治 1-1-1
TEL: 075-753-3111

KYOTO LECTURES
Monday, June 24th, 18:00h

Pierre-Emmanuel Roux
Andreas Kim Taegon (1821-1846)
The Clandestine Life and Heroic Afterlife of the First Korean Catholic Priest

SPEAKER
Pierre-Emmanuel Roux is an associate professor and the director of the Center for Studies of East Asian Christianity at the Catholic Institute of Kyoto, Japan. He has published several books on the history of Christianity in Korea, including "The Clandestine Life and Heroic Afterlife of the First Korean Catholic Priest".

会場：アンナ・マリ・アリーヌ追悼記念会 講義ホール
160-8302, Kyoto, Japan
〒617-8501 京都府京都市伏見区南宇治 1-1-1
TEL: 075-753-3111

七月

イヴァン・アリーヌ追悼記念
ブリジット・アリーヌ講演会
日本詩を仏訳する幸せ

BRIGITTE ALLOUX
Le bonheur de traduire de la poésie japonaise en français

日時：2019年7月6日(土曜日) 午後4時~5時半
会場：京都大学人文科学研究所 セミナー1

講師：ブリジット・アリーヌ
BRIGITTE ALLOUX
Poésies de tous les jours

会場：京都大学人文科学研究所 セミナー1
〒617-8501 京都府京都市伏見区南宇治 1-1-1
TEL: 075-753-3111

人文研アカデミー2019
本づくりの舞台裏

京大文学部
京都府立総合政策大学

【講演】
古川隆之「書こころの海を渡る」
【座談会】
2019年6月30日(土) 13:00~17:00

明治大学リマテ(タワー)3階1032

KYOTO LECTURES
Thursday, July 18th, 18:00h

Francesco Eugenio Barbieri
The "Global Novel" of Murakami Haruki and Elena Ferrante: A Comparative Perspective

SPEAKER
Francesco Eugenio Barbieri is an associate professor and the director of the Center for Studies of East Asian Christianity at the Catholic Institute of Kyoto, Japan. He has published several books on the history of Christianity in Korea, including "The Clandestine Life and Heroic Afterlife of the First Korean Catholic Priest".

会場：アンナ・マリ・アリーヌ追悼記念会 講義ホール
160-8302, Kyoto, Japan
〒617-8501 京都府京都市伏見区南宇治 1-1-1
TEL: 075-753-3111

人文研アカデミー 2019
夏期公開講座
石作再読
ひまわりをよむなほに面影M 13

講師：石作真生
可能性としての子ども「嵐土記」
「ひまわりをよむなほに面影」
「ひまわりをよむなほに面影」

2019年7月13日(土)
13:00~17:00
京都大学人文科学研究所本館
中央ホール(大講堂)4階13号講義室

予約・要
聴取料

人文研アカデミー 2019
夏期公開講座

京都府立総合政策大学
総合政策学系

講師：松本 浩一
講師：松本 浩一
講師：松本 浩一

会場：アンナ・マリ・アリーヌ追悼記念会 講義ホール
160-8302, Kyoto, Japan
〒617-8501 京都府京都市伏見区南宇治 1-1-1
TEL: 075-753-3111

京都大学人文科学研究所
**高校生のための
夏期セミナー**

人文学への招待
歴史にじかに触れる

【日時】2019年8月17日(土) 10:30-14:30
 【会場】京都大学人文科学研究所 (本館4階セミナー室1)
 【予約】

10:30-11:30 伊藤 順二 (近代ロシア史・准教授)
 「歴史をふりかえるということ
 ～第一次世界大戦をめぐって～」

13:30-14:30 藤井 律之 (中国古代史・助教)
 「紙の発明がもたらしたもの」

参加費 無料・送料・保険料・保護者同伴可
 予約は下記URLからお願いいたします。ご不明な点についてはお問い合わせください。
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 京都大学人文科学研究所 総務課
 電話 075-753-4600
 E-mail: kyuhok@kyushok.kyoto-u.ac.jp

八月

特別講演会
**THE DEVELOPMENT OF COLOSSAL IMAGES
WITHIN THE BUDDHIST TRADITION OF SOUTH ASIA**
 PIA BRANCACCIO 教授 (トロント大学)

2019年7月27日(土)午後四時
 京都大学人文科学研究所本館1階セミナー室1

南アジアの仏教美術の発展をめぐって。南アジアの仏教美術は、その発展の過程で、巨大な像の制作を特徴とする。この巨大な像の制作は、南アジアの仏教美術の発展を促した。この巨大な像の制作は、南アジアの仏教美術の発展を促した。この巨大な像の制作は、南アジアの仏教美術の発展を促した。

京都大学人文科学研究所 総務課 電話 075-753-4600

特別講演会
**Turanians of Asia
Myths and the Missing Race**
 Prof. Vimalin Rujivacharakul
 (デラウェア大学)

京都大学人文科学研究所本館1階セミナー室1
 2019年7月26日(金) 午後6時

南アジアの歴史をめぐって。南アジアの歴史は、その発展の過程で、巨大な像の制作を特徴とする。この巨大な像の制作は、南アジアの歴史を促した。この巨大な像の制作は、南アジアの歴史を促した。この巨大な像の制作は、南アジアの歴史を促した。

京都大学人文科学研究所 総務課 電話 075-753-4600

継承と発信
**「みやこの学術資源」の
90年**

10月17日(土) 10時30分～12時30分
 10月18日(日) 10時30分～12時30分

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600

十月

東京大学主催
養東

10月17日(土) 10時30分～12時30分
 10月18日(日) 10時30分～12時30分

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600

特別講演会
2019 KYOTO LECTURES
 Thursday, September 19th, 18:00h

Speaker: Danny Ojibach
The Multiple Faces of Japanese Military Disobedience, 1868-1937: Roots and Consequences

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600

九月

特別講演会
2019 KYOTO LECTURES
 Thursday, October 31st 18:00h

Speaker: William G. Clarence-Smith
The French Campaign Against Imports of Japanese Cultural Pearls in the Interwar Years

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600

特別講演会
**Imperiled Destinies
Debt and Redemption
in Medieval Daoism**

October 24, 2019 18:00-19:30
 Francisca Verellen
 (Tokyo Institute of Comparative Culture)

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600

SOCIALIST CULTURAL NETWORKS
**社会主義文化のネットワーク
JAPAN, CHINA, THE SOVIET
日本、中国、ソ連、そして東欧
UNION, AND EASTERN EUROPE**

東京大学駒場キャンパス KIBER10号室
**2019年10月19日
13:00-18:00**

石川浩一 准教授 京都大学人文科学研究所
 ANASTASHA FEDOROVA NATIONAL
 RESEARCH UNIVERSITY HIGHER
 SCHOOL OF ECONOMICS INSTITUTE
 FOR ORIENTAL AND CLASSICAL
 STUDIES 経済学研究所 日本
 大学経済学研究所 准教授 石川浩一
 京都大学人文科学研究所 IRINA HOLCO
 准教授

京都大学人文科学研究所 総務課
 〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町1-1
 電話 075-753-4600



主催 京都大学人文科学研究所
協賛 京都大学学術出版部

《一般公開セミナー》 **参加無料**

明智光秀は名医?だった
— 転換期の医術と戦国武将 —

会期: 2月8日(土) 10:30~16:30 (開場 10:00)
会場: 京都大学 芝罘会館 山内ホール
京都大学学術出版部 京都大学学術出版部
事前申込: www.kyoto-u.ac.jp/kyoinfo/kyoinfo.html 先着 150名
(申込先着順) (申込費 0円)

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

【報告1】 2月8日(土) 10:30~11:30
「光秀の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

【報告2】 2月8日(土) 11:30~12:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

◆報告3◆ 2月8日(土) 12:30~13:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

◆報告4◆ 2月8日(土) 13:30~14:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

◆報告5◆ 2月8日(土) 14:30~15:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

◆報告6◆ 2月8日(土) 15:30~16:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

◆報告7◆ 2月8日(土) 16:30~17:30
「戦国武将の医学的素養と戦国武将の転換期」

◆報告者◆ 岡田 晴彦 京都大学人文科学研究所 准教授

京都大学人文科学研究所 協賛

2020 KYOTO LECTURES
Friday, February 7th, 18:00h

Simon Partner

Art, Gender, and Community in an Age of Revolution
The Life of a Samurai Housewife and Artist in Kishū Domōri, 1830-1880

SPREADS
This poster is about the life of a samurai housewife and artist in Kishū Domōri, a small town in the Kishū Peninsula, Wakayama Prefecture, during the Edo period. The poster is about the life of a samurai housewife and artist in Kishū Domōri, a small town in the Kishū Peninsula, Wakayama Prefecture, during the Edo period. The poster is about the life of a samurai housewife and artist in Kishū Domōri, a small town in the Kishū Peninsula, Wakayama Prefecture, during the Edo period.

Event Professor of Eastern Studies 2019
Institute of East Asian Studies, 10-2-1
Kyoto University, Kyoto, Japan 606-8501
075-753-5111 Email: info@eastasian.kyoto-u.ac.jp

二月

京都大学人文科学研究所 協賛

2020 KYOTO LECTURES
Wednesday, January 29th, 18:00h

Cyran Pitteloud

Environmental Expertise in Modern Japan and the Ashio Copper Mine Case

SPREADS
This poster is about the environmental expertise in modern Japan and the Ashio Copper Mine case. The poster is about the environmental expertise in modern Japan and the Ashio Copper Mine case. The poster is about the environmental expertise in modern Japan and the Ashio Copper Mine case.

Event Professor of Eastern Studies 2019
Institute of East Asian Studies, 10-2-1
Kyoto University, Kyoto, Japan 606-8501
075-753-5111 Email: info@eastasian.kyoto-u.ac.jp

京都大学人文科学研究所 協賛

プラマニズムとヒンドウイズム
第7回 シンポジウム

マヤツタの社会と宗教の連続性と断絶

古代・中世インドの社会と宗教
「聖典」の諸相

パニニの文法学とインドの社会と宗教
マヤツタの社会と宗教の連続性と断絶
聖典の諸相

2020年2月23日(日) 10:30~16:30
京都大学 芝罘会館 山内ホール

主催 京都大学人文科学研究所
協賛 京都大学学術出版部

2020年2月21日(金) 15:00~18:00
京都大学人文科学研究所本館セミナー室1

特別講演会
Rediscovering the Iranian Antiquity
Recent Archaeological and Epigraphical Researches on the Sasanian Sites

講演1
Carlo Carletti (Caixa de Catalunya University of Rome)
The Pahlavi Project:
Researches on Narseh's Monument and Inscription in Isad Kustidan

講演2
Youssef Moradi (ICPAS University of London)
Tahireh Soleymani in the Light of Archaeological Excavations:
Report of Seasons 2002-2004

2020年2月21日(金) 18:00~19:30
京都大学人文科学研究所 大講堂

特別講演会
キリスト教布教における理性と信仰

講師: 平岡 隆二
京都大学人文科学研究所 准教授

フランス国立権東学院京都支部
3F303号室

京都大学人文科学研究所 協賛

国際研究セミナー

EUROPEAN CRISIS IN HISTORICAL PERSPECTIVES



日時: 2020年3月18日(水) 15:00~18:00
会場: 人文研本館セミナー室2

メイン報告: Serena Ferente (King's College, London): An archaeology of populism: 'the people' in European political discourse
サブ報告: 小関隆、八谷舞

使用言語: 英語(日本語による介入も歓迎します)



彙報 (二〇一九年四月より二〇二〇年三月まで)

おくりもの

- 立木康介准教授はフランス教育功労勲章(シユヴァリエ級)を受賞(二〇一九年一月七日)。
- 岡村秀典教授は第十三回立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞を受賞(二〇一九年六月二二日)。
- 藤原辰史准教授は第十回辻静雄食文化賞を受賞(二〇一九年七月四日)。
- 藤原辰史准教授は第四一回サントリア学芸賞を受賞(二〇一九年十一月七日)。
- 倉本尚徳准教授は日本学術振興会賞を受賞(二〇一九年十二月二四日)。
- 倉本尚徳准教授は日本学士院学術奨励賞を受賞(二〇二〇年一月十四日)。

人のうごき

- 岡村秀典教授(東方学研究所)を当研究所長に併任(二〇一九年四月一日)。(二〇二一年三月三十一日)。

- 小関隆教授(人文学研究所)を副所長に併任(二〇一九年四月一日)。(二〇二一年三月三十一日)。
- 稲葉穰教授(東方学研究所)を副所長に併任(二〇一九年四月一日)。(二〇二一年三月三十一日)。
- 稲葉穰教授(東方学研究所)を附属東アジア人情報学研究所長に併任(二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。
- 石川禎浩教授(東方学研究所)を附属現代中国研究センター長に併任(二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。
- 宮宅潔准教授は、教授(東方学研究所)に昇任(二〇一九年四月一日付)。
- 平岡隆二は、准教授(東方学研究所)に採用(二〇一九年四月一日付)。
- 倉本尚徳は、准教授(東方学研究所)に採用(二〇一九年四月一日付)。
- 森下章司は、客員教授(文化研究創成研究部門、二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。

- NOGUEIRA RAMOS, Martin は、客員准教授(文化研究創成研究部門、二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。
- 井狩彌介は、特任教授(二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。
- VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授(二〇一九年四月一日)。(二〇二〇年三月三十一日)。
- 王寺賢太准教授(人文学研究所)は、辞任の上(二〇一九年八月三二日付)、東京大学大学院人文社会系研究科准教授に就任。
- 高階絵里加准教授は、教授(人文学研究所)に昇任(二〇一九年十月一日付)。
- 都留俊太郎は、助教(附属現代中国研究センター)に採用(二〇二〇年一月一日付)。
- 徳永悠助教(人文学研究所)は、人間・環境学系准教授に配置換え(二〇二〇年三月三十一日付)。
- 藤井正人教授(人文学研究所)は、定年により退職(二〇二〇年三月三十一日付)。

。武田時昌教授（東方正学研究部）は、定年により退職（二〇二〇年三月三日付）

海外での研究活動

。池田巧教授（東方正学研究部）は、二〇一九年八月七日大阪発、西南民族大学等において科研費課題にかかる資料収集・調査等を行い、第五回中国西南地区漢藏語国際検討会に参加し研究発表を行い、二〇一九年九月六日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、二〇一九年八月八日羽田発、アメリカ社会学会に参加し意見交換・情報交換を行い、ハーバード大学等において科研費課題にかかる資料収集等を行い、二〇一九年九月二三日帰国。

招へい研究員

。Walker, Gavin マギル大学大学院歴史学部准教授

ポスト六八年日本の思想的再検討
（文化連関研究客員部門）
受入教員 王寺准教授
期間 二〇一九年三月一日～二〇一九

年五月三一日

。楊 振紅 南開大学歴史学院教授
出土史料を用いた中国古代法制史の研究
（文化生成研究客員部門）

受入教員 宮宅教授
期間 二〇一九年三月八日～二〇一九年六月七日

。BRANCACCIO Pia ドレクセル大学准教授

南アジア美術における佛教の記念碑的建造物の研究
（文化生成研究客員部門）

受入教員 稲葉教授
期間 二〇一九年六月十五日～二〇一九年九月十四日

。Orbach Danny エルサレム・ヘブライ大学 Senior Lecturer

一八八〇年代朝鮮半島における大陸人の歴史研究
（文化連関研究客員部門）

受入教員 福家准教授
期間 二〇一九年七月一日～二〇一九年九月三十日

。Harrison Faye イリノイ大学アーバ

ナシヤンペーン校人類学科／アフリカ系アメリカ研究教授

人種・人種化・（不）可視性をめぐる人類学的研究
（文化生成研究客員部門）

受入教員 竹沢教授
期間 二〇一九年九月二二日～二〇一九年十二月二二日

。JUDGE Joan ヨーク大学歴史学部教授

清末民国初期の啓蒙書（日用類書）とその中国読者
（文化連関研究客員部門）

受入教員 石川教授
期間 二〇一九年九月二五日～二〇二〇年三月十五日

。Ferente Serena ロンドン大学キングズ・カレッジ歴史学科准教授

中世・ルネサンス期のイタリア・地中海史
（文化生成研究客員部門）

受入教員 小関教授
期間 二〇二〇年一月一日～二〇二〇年三月三一日

招へい外国人学者

- 。漆 麟 西南大学美術学院准教授
日中戦争期のモダニズム美術に関する
日中比較研究
受入教員 石川教授
期間 二〇一七年十一月十五日～二〇一九年十一月十四日
- 。JACQUET, BENOIT フランス国立
極東学院准教授
建築文化からみたアジアのフロンティアの研究
受入教員 稲葉教授
期間 二〇一八年七月十七日～二〇一九年六月三十日
- 。宋 丹 湖南大学外国語与国際教育学
院日語系助理教授
日本における『紅樓夢』の翻訳と受容に関する研究
受入教員 永田准教授
期間 二〇一八年七月二十五日～二〇一九年六月三十日
- 。VERDON, Noemie ナーランダー大
学講師
六十一世紀カーピシーIIガンダー
ラ地方の宗教・学術・政治史の研究
受入教員 稲葉教授
期間 二〇一八年八月一日～二〇一九年七月三十一日
- 。秦 翠翠 河南理工大学外国語学部講
師
京都における「洛陽」文化の受容
受入教員 岡村教授
期間 二〇一八年十月二日～二〇一九年十月二日
- 。王 剛 西南大学歴史文化学院講師
日本と清末の軍事改革
受入教員 石川教授
期間 二〇一八年十一月二八日～二〇一九年十一月二七日
- 。陳 偉 武漢大学歴史学院教授
中国秦漢時代の簡牘史料よりみた古代
帝国の実像
受入教員 宮宅准教授
期間 二〇一八年十一月二八日～二〇一九年十二月九日
- 。李 瑄 四川大学中国俗文化研究所教
授
清初渡日黄檗僧の研究
受入教員 永田准教授
- 期間 二〇一九年二月一日～二〇二〇年一月三十一日
- 。李 磊 華東師範大学歴史学系副教授
秦漢六朝時代の東アジアにおける政治
構造と天下概念
受入教員 宮宅准教授
期間 二〇一九年二月二八日～二〇二〇年二月二七日
- 。汪 娟 銘伝大学教育暨応用語文学院
応用中国文学系教授
敦煌摩尼教文献と仏教の関係
受入教員 永田准教授
期間 二〇一九年四月一日～二〇一九年八月三十一日
- 。許 全勝 復旦大学文史研究院副研究
員
漢唐の石刻と文体の研究
受入教員 永田准教授
期間 二〇一九年四月十五日～二〇一九年八月十五日
- 。秦 樺林 浙江大学中国古代史研究所
講師
日藏古写本、秦漢簡牘
受入教員 永田准教授
期間 二〇一九年五月一日～二〇二〇

年四月三十日

。劉雅君 上海大学社会科学学部副
授

東アジア史の視点からみた漢唐時代の
皇太子制度

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年七月三十一日～二〇二
〇年七月三十日

。陳瑤 厦門大学人文学院歴史系・助
理教授

中国近代長江中流域木造船航海運業の
研究

受入教員 村上准教授

期間 二〇一九年八月二日～二〇二
〇年八月二日

。FOGEL, Joshua エーグ大学歴史学
部教授

二十世紀の日本と中国におけるエス
ペラント運動について

受入教員 石川教授

期間 二〇一九年九月二六日～二〇二
〇年三月十五日

。方艶 江蘇師範大学文學院教授

中日王権神話の比較研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月二日～二〇二

。張葦航 上海中醫藥大學科技人文研
究院副教授

日本古医書研究

受入教員 平岡准教授

期間 二〇一九年十一月二八日～二〇
二〇年七月三十一日

。馬茜 寧夏行政学院政治学教研部副
教授

抗日戦争時期の日本の「回教工作」に
関する研究

受入教員 中西准教授

期間 二〇一九年十二月九日～二〇二
〇年十一月三十日

外国人共同研究者

。李媛 北海道大学文学研究科専門研
究員

日本古辞書の翻刻階層モデルの構築に
関する人文情報学的研究

受入教員 安岡教授

期間 二〇一七年九月十一日～二〇一
九年九月十日

。魏永康 東北師範大学歴史文化学院

講師

秦漢時代の民族政策と辺境統治

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一七年九月二一日～二〇一
九年九月二十日(継続)

。李子捷 日本学術振興会外国人特別
研究員

中国五～八世紀の如来藏思想の根本的
再評価

受入教員 船山教授

期間 二〇一八年四月二十日～二〇一
九年四月十九日

。林磊 復旦大学歴史学系博士課程

一九三七～一九四五年に日本学者が華
北で実施した考古調査と中国学界へ
の影響

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年三月二八日～二〇一
九年九月二八日

。陳鳴 華南農業大学人文与法学学院
講師

秦漢『盜律』・『賊律』の研究

期間 二〇一九年八月十九日～二〇二
〇年八月十八日

受入教員 宮宅教授

。HAYASHI, John ハーバード大学
Ph.D. Candidate

日本統治時代から戦後にかけての台湾
における治水事業や衛生事業

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一九年九月十五日～二〇二〇

年九月一日

。趙 様錫 ハイデルベルク大学 Ph.D.

Candidate

東アジアにおける救荒作物に関する書
籍の研究

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一九年十月七日～二〇二〇

年三月三十一日

。PITTELOUD, Cyrian Janek フラン

ス国立極東学院 Research Assistant
近代日本における水質汚染と環境紛争
について

受入教員 福家准教授

期間 二〇二〇年一月九日～二〇二〇

年八月三十一日

。SCHAEFFER, Charlotte Johanna ハ

イデルベルク大学 Ph.D. Candidate
日本における自閉症者を初めとする精
神障害者の雇用

受入教員 藤原准教授
期間 二〇二〇年一月十四日～二〇二〇

年六月三十日

。RODRIGUES, Jania Pacheco バー

ミンガム大学 Visiting Lecturer

Shamanism through the body: yuta's

women's shamanic narratives on
embodied pain, collective wellbeing
and spirit communication

受入教員 石井准教授

期間 二〇二〇年三月八日～二〇二〇

年五月八日

外国人研究生

。趙 晔

近代日本における中国労働者―人口移
動という視点から

受入教員 村上准教授

期間 二〇一七年十月一日～二〇二〇

年三月三十一日

。Vargha Attila

超境する日系二世アメリカ人のアイデ
ンティティ

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一八年十月一日～二〇二〇

年三月三十一日

。石垣 章子

漢訳仏典として位置付けられた疑偽経
典の成立と思想の系譜

受入教員 船山教授

期間 二〇一八年四月一日～二〇二〇

年三月三十一日

。王 星

六～八世紀の華北における陶磁器の考
古学的研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一八年十月一日～二〇一九

年九月三十日

。馬 延輝

『儀礼』学研究

受入教員 古勝准教授
期間 二〇一九年四月一日～二〇二〇

年三月三十一日

。陳 瑞峰

中国佛教疑偽経敦煌寫本識語の研究
受入教員 船山教授

期間 二〇一九年五月一日～二〇二〇

年四月三十日

。趙 芙蝶

人文科学とデジタル デジタル人文プ

ロジエクトユージャー指向のデザイン

受入教員 Wittern 教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇

年九月三十日

。曹 天江

秦漢魏晉時代における「計校」事務の

研究

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇

年九月三十日

。Qianqing Huang

十九二十年代、三十年代の日本におけ

る被差別部落

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇

年九月三十日

。常 鉦熙

北宋時代における洛陽盆地の考古歴史

学的研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇

年九月三十日

短期交流学生

。靳 健

京都大学人文科学研究所所蔵中国青銅
器資料の学史的 research

受入教員 向井准教授

期間 二〇一九年九月二五日～二〇一

九年十二月二四日

。白 豆

日本所在資料からみた中国近世・近代

災害史の研究

受入教員 向井准教授

期間 二〇一九年九月二五日～二〇一

九年十二月二四日

。石 暁潤

旧石器文化をめぐる日中比較研究―泥

河湾盆地旧石器中期文化を起点とし

て―

受入教員 向井准教授

期間 二〇一九年九月二五日～二〇一

九年十二月二四日

東アジア人文学情報学センター講習会

。二〇一九年度漢籍担当職員講習会（初

級）

第一日（九月三十日）

開講挨拶・オリエンテーション

稲葉 穰

漢籍について 永田 知之

カードの取り方―漢籍整理の実践 福谷 彬

第二日（十月一日）

工具書について 高井 たかね

漢籍関連サイトの利用

Wittern, Christian

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月二日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月三日）

和刻本について（大学院文学研究科

教授） 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月四日）

朝鮮本について 矢木 毅

実習解説 福谷 彬

情報交換 安岡 孝一

終了挨拶 稲葉 穰

。二〇一九年度漢籍担当職員講習会（中

級）

第一日（十月二八日）

稲葉 穰

開講挨拶・オリエンテーション

稲葉 穰

経部について

古勝 隆一

叢書部について

藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日 (十月二十九日)

史部について

古松 崇志

漢籍データベース実習 (一)

第三日 (十月三十日)

子部について

稲本 泰生

漢籍データベース実習 (二)

第四日 (十月三十一日)

集部について (大学院人間・環境学
研究科教授)

漢籍データベース実習 (三)

道坂 昭廣

第五日 (十一月一日)

漢籍と情報処理 Wintern, Christian

実習解説

福谷 彬

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

稲葉 穰

お客さま

。九月二十六日 清華大学 学長 邱勇
他七名

(岡村、石川、池田、古勝が対応した)

。十一月十五日 ベルギー ルーヴァン

大学 准教授 Jan Schmidt

(小関、クナウト、藤原が対応した)

。十二月十八日 ウズベキスタン文化遺

産保存協会 理事 セルゲイ・ラプチ

エフ 他十一名

(稲葉、向井が対応した)

宝塚少女歌劇と京大民俗学会… ワークシヨップ「帝国日本と少 女歌劇」余話

菊地 暁

共同研究「暴力・宗教・性の語りをめぐる」の班長を引き継ぐことになったのも何かの弾みなら、その一環としてワークシヨップ「帝国日本と少女歌劇」(二〇一九年九月六日)を企画したのも何かの弾みだった。きっかけは、京大総合博物館で開催した「華北交通写真展」トークイベントの打ち上げ。鉄道網を駆使して日本のみならず朝鮮、台湾、満洲でも公演する奇妙な劇団「日本少女歌劇座」を追いかけていた鶴飼正樹さん(社会学)との酒席の会話をきっかけに、その場にいた貴志俊彦さん(非文字資料論)、佐藤守弘さん(視覚文化論)をも巻き込んで、ワークシヨップの開催とあいなった。当日は、さらに宮本直美さん(社会学)、細井尚子さん(東アジア芸能史)、三須祐介さん(近現代中国文化論)、輪島裕介さん(音楽学)をお招きし、東アジア世界で繰り広げられる少女歌劇の歴史性と多様性を縦横無尽に議論していただいた。

フロアにいた佐藤健二さん(社会学)からは、「帝国」「日本」「少女」「歌劇」というそれぞれに固有の歴史性を帯びた概念／問題系が交錯するこのテーマを、少女歌劇というパフォーマンズの具体像から実証的にも理論的にも考察を深めるのは、非常に有効なのではないかとのコメントを頂戴した。企画者がきちんと言語化できていなかったところをクリアにしていただし、恐縮するとともに企画の意義を再確認させていただいた次第である。

ところで、この企画にはもう一つ、私の個人的事情があった。もう二〇年近く前、少女歌劇にまつわるインタビュースタッフをしたまま、どう扱ったものか考えあぐねて放置していたのを、何かヒントが得られないかとの下心でワークシヨップ運営を引き受けたのだ。インタビュースタッフしたのは宝塚歌劇団の演出家・渡辺武雄さん(一九一四―二〇〇八)。その頃から民俗の資源化というテーマに関心を抱いていた私は、一九七〇年大阪万博の「お祭り広場」プロデューサーとして民俗芸能の舞台化に当たった渡辺さんにインタビュースタッフを申し込んだ。渡辺さんは台北の生まれ、関西学院大学進学を機に内地に渡り、在学中から舞台芸術を志望、東宝、松竹、宝塚でキャリアを積み重ね、一九六一年の宝塚歌劇冬組公演「火の鳥」で芸術祭文部大臣賞を受賞する

など、宝塚歌劇の歴史に輝かしい足跡を残した演劇人である（池田文庫編・発行『宝塚歌劇における民俗芸能と渡辺武雄』（二〇一二年）参照）。

渡辺さんは、民俗芸能をモチーフに、日本の伝統に根差した新しい舞台芸術の創造を模索、一九五八年、宝塚歌劇内に「日本郷土芸能研究会」を設立し、各地の民俗芸能を探訪していった。興味深かったのは、設立当初、初歩的な調査法の見当もつかなかったため、知人を介して京都市文学部人文地理学研究室を訪問、その際、研究室に残されていた民謡の録音盤をダビングしたという話だ。この一件は、財団法人阪急学園池田文庫編・発行『日本民俗芸能資料目録（改定版）』（二〇〇六年）にも記されており、研究会設立を十年以上遡る一九四〇年代の録音データが目録に記載されていることから確認できる。ただ、ちよつとした誤解があつて、この録音盤は正確にいえば人文地理学研究室のものではない。戦時中、国史学研究室の助手を務め、京大民俗学会の中心メンバーでもあつた平山敏治郎さん（一九一三―二〇〇七）による民謡調査の成果であり（『彙報』『史林』二七／四、一九四二年）、当時の史学科五教室がいずれも文学部陳列館を資料の保管場所に使つていたため、資料の帰属の錯誤が生じたのだろう。それにしても、京大民俗学会の調査デー

タが宝塚少女歌劇の創作に活用されていたというのは、なかなか面白い。

「帝国日本と少女歌劇」についても、渡辺さんは興味深いお話をしてくださつた。一九四〇年、台湾高砂族の舞踊に取材した作品を作る際、作曲家と踊り子二名を連れて台湾・花蓮を訪問、アミ族の舞踊を見学し、踊り子は「蕃人の中に入つていつて一緒に踊つた」のだそう。なるほど、今ほどAV機材が簡便ではない時代、芸能を記録するにはパフォーマーを連れていつて覚えさせるといふのが一番確実な方法だったのかと感心させられたのだが、渡辺さんは続けて次のようなことを語つた。「踊りが終わつたら、「生蕃の」男が踊り子をブワツと持ち上げて、「日本人の」女の子がキヤーツと言つて、それから酋長が女の子を家に招いて、『あぶない！ あぶない！ 絶対に行つちゃダメ！』とお巡りさんが言つて……」。往時の台湾での出来事を樂しそうに想起する渡辺さん。その語りには、内地人／原住民というコロナアルな非対称性と、男／女というセクシュアルな非対称性が、独特のゆらぎをとまなつて潜んでいたように（今にして）思う。こうした語りを、どのように受け止めれば良かったのだろうか。

渡辺さんとは幽冥境を異にしてしまつた。そして、「帝国日本と少女歌劇」という刺激的なワークシヨッ

ブを終えてなお、私は考えあぐねている。

ゴミを残す

岩城 卓二

この三月で三年間取り組んできた共同研究班「生と創造の探究」が終了した。前身の「環世界の人文学」をあわせると、五年間の長い研究班となった。

共同研究班には「みえる成果」と「みえない成果」がある。二つの研究班であれば、もっとも大きな「みえる成果」は、二〇二一年の刊行を目指して準備している論集『地球危機時代の人文学―生・環境・文化をめぐる歴史と理論』（仮題）となる。書名に相応しい成果となるよう努力したいが、研究会だけでも六八回・報告者七人にも及んだ議論のすべてが、ここに反映されるわけではない。報告者が試行錯誤を繰り返した数千時間に及ぶであろう準備時間も加えると、「みえる成果」となるのはごくごく一部に限られる。

二つの研究班は、専門分野が異なる石井美保さん、

大浦康介さん、瀬戸口明久さん、田中祐理子さん、藤原辰史さんと私の六人が世話人会をつくって、密な相談を重ねながら班員・報告者を選ずるというスタイルをとった。班員のみなさんには申し訳ないのだが、分野違いの世話人六人がもつネットワークから、知らなかつた研究者を紹介し合い、班員になっていただくか、否かを吟味した。報告前に配付される報告要旨を読んで期待感がすごいときもあれば、「うーん」「わかんないなあ」と悩まされることもあったが、こうした準備も貴重な時間であった。六人のネットワークがなくなり、分野を超えて広がったことも意義深い。

人選に時間をかけたからなのであるが、班員には歴史学・芸術学・哲学・文化人類学・民俗学・文学・言語学・経済学等々、多彩な分野の強者たちが集まり、報告が対象とした現場も日本・韓国・インド・インドネシア・ドイツ・フランス・ガーナ・太平洋海域等々、世界規模の広がりを持つことになった。現場で「生と創造」を実践する建築家・陶芸家・作家のみなさんをゲストスピーカーとして招き、実践している人たちの深い話を聞くこともできた。

人文系の研究者は、総じて自分のアイデアや考えていることを惜しげもなく人前で喋る。秘技であるはずの必殺技・得意技をどんどん繰り返し出して議論を盛り上

ける。多彩な班員が集まった二つの研究班は異種格闘技戦となり、出せる技がなくなるまで議論が続くこともしばしばであった。班員は、この議論から計り知れない知の恩恵に与ったはずなのだが、残念なことに、これを個々の論文・著書で確かめることはとても難しい。それが研究班の濃密な議論をふまえての成果なのか。それとも議論とは無関係な個人技なのかは、実は本人さえもわからないことが多い。濃密な議論の時間がなくても、最初から強者を班員に集めれば、一定以上の成果は約束されているともいえる。ここが共同研究班の成果を論文・著書で評価することの難しさなのだと思う。

班員の人選や報告を理解するための準備、研究会の議論等々、二つの研究班の「みえない成果」は実に大きく、人文系研究にそれなりの貢献もしたと思うのだが、税金を使った研究は評価されて、ランク付けされる時代に評価の対象となるのは、「みえる成果」だけである。論集のような成果の出方は評価されないことが多く、「社会的に影響力」があるとされる雑誌に掲載された論文や英語で書かれた論文が何本あるか、あるいは国際シンポの回数、海外に研究拠点をもち研究者の参加人数といった数値化できるものが、重要な評価指標となる。「数値化できる成果」でしか評価で

きないのであれば、学識経験者が評価する必要などなく、それこそAIに任せられた方が「公平」だと思うが、評価する側も時間に追われ、疲れているのであろう。かつては優れた学識経験者の眼力で評価されていた「みえない成果」の地位は、低下する一方である。

歴史家の端くれとして迂闊だったのは、評価の対象にならなくても、共同研究班にとっては意義ある「みえない成果」を記録化し、残すための努力を怠ったことである。参加者名簿やレジュメは残しているが、白熱した議論の場を録音・映像記録してこなかった。密かに盛り上がった世話人会のことも、世話人個々の記憶に残るだけである。報告依頼や開催案内、事前に配布される報告要旨は私のパソコンにメール・添付ファイルとしてまだ保存されているものが多いが、誤って消去してしまったものもある。

評価に不要な「みえない成果」などゴミなのであろう。ゴミはさつさと廃棄しなさいという意見もあるが、ゴミ扱いされても残す必要があると考えるのは、未来の歴史家に「みえない成果」の評価を託したいからである。

歴史家はゴミ扱いされてきたものから価値を発見することに長けている。ゴミ箱を引つ繰り返して、何かを見出そうとする。私もゴミが大好きで、訴訟であれ

ば、御上に差し出した訴状・返答書や判決文といった公式記録よりも、その下書きや走り書き、関係者たちの本音が読み取れる手紙等々に興味を引かれる。これらは、ほっておかれたら、いずれ襖の下張にでもされていたのであろうが、意図はわからないが十分に整理もしないで、とにかく袋詰めや紙紐で縛って残そうとしてくれた江戸時代人のおかげで、私は公式記録からではわからない事件の深みを知ることができている。判決文の裏に隠された真相やウソがわかることもある。真理はゴミのなかに埋もれている、と思わされることも少なくない。

京都大学の「公正推進アクションプラン」に則り、人文研でも共同研究班のデータ保存が定められている。「公正」が検証できることに重きが置かれている感があるが、これからはとにかく徹底的に諸事を記録して残そうと思う。どうでもよい研究班で出されたお茶菓子も記録しよう。「ゴミを残すプラン」である。

歴史家には大切に保存されたものよりも、ゴミ扱いされてきたものに関心を持つ人が少なくない。ゴミのなから、いまは評価されない「みえない成果」に気付く歴史家が登場すると信じている。そのためにもゴミは多い方がよい。ただし、学問的には何の価値もなかったという評価を下されても文句は言えない。

一〇〇年前の雲岡石窟写真

岡村 秀典

雲岡石窟がはじめて研究者によって「発見」されたのは一九〇二年のことである。東京帝国大学建築学教室の伊東忠太は、遼金時代の遺跡調査のために大同を訪れた際、偶然に役人から北魏石窟の話聞き、現地を調査したのであった。この報に接したフランスのシヤヴァンヌは一九〇七年に雲岡石窟を調査し、写真七八枚を発表した。これが世界的に大きな反響を呼んだ。一九一四年には北京から大同にいたる鉄道が開通し、交通の便が格段によくなったことにより、以後、多くの研究者や好事家たちが現地を探索した。

わが東方文化研究所の水野清一らが雲岡石窟の調査に着手したのは、日中戦争勃発直後の一九三八年のことである。しかし、そのとき造像の一部はすでに甚大な破壊に遭っていた。一九二九年の夏、軍閥が骨董商と結託し、夜陰に乗じて付近の村民らと仏頭を盗鑿したのである。同年九月と十月に民国政府が被害状況を調査したところ、石窟全体で計一三七個の仏頭が掠め

取られていた。一九三一年になって地元政府はようやく「雲岡石仏寺保管委員会」を設置し、官憲によって石窟が保護されるようになったのである。

このような経緯から、水野は破壊前の石窟写真の収集に努めた。窟内は薄暗いため当時の技術では撮影がむずかしく、多くは外景や太陽光の差し込むところに限られたが、いま当研究所には日本人カメラマンによる一〇〇年前の石窟写真が多数保管されている。

その最古のものが一九〇九年九月に早崎稜吉が撮影した四切サイズの大きなガラス乾板である。早崎は東京美術学校の岡倉天心の書生となり、一八九三年には岡倉の中国美術調査にカメラマン兼通訳として同行し、龍門石窟なども調査していた。かれは戦後まで中国古美術商として活躍しており、その縁で水野と知己をえたいらしい。当研究所が保有する早崎のガラス乾板は大小サイズ計二二三枚あり、学術資源としてきわめて貴重である。

二〇世紀はじめに北京に山本照像館を開設した山本讀七郎は、東京帝国大学建築学教室の塚本靖や関野貞らの中国調査に同行し、数多くの文化遺産を撮影している。雲岡石窟に関しては長男の山本明と弟子の岩田秀則が撮影を主に担当しており、関野の手に渡ったガラス乾板は東大の建築学教室と東洋文化研究所に保管

されている。山本明が手元に置いていた分は、その後、同研究所に寄贈され、平勢隆郎教授らによる整理を経て同研究所のホームページで公開されている。

旧制三高寮歌「逍遙の歌」の作詞者として知られる澤村専太郎は、京大文学部で教鞭をとっていた一九二三年、文部省在外研究員として中国に渡り、美術調査をおこなった。このとき雲岡石窟や龍門石窟の調査にカメラマンとして同行したのが岩田秀則である。岩田は後に山本照像館を継承し、雲岡石窟の三五一枚セツトの写真焼付けを独自に販売した。当研究所に現存しているその写真には、すべて「© H. Inada Peking」のクレジットが焼付いてある。これには後日談があり、澤村は同年十二月に北京大学で講演し、雲岡石窟で撮影した写真二四枚を『大同石窟佛像照片集』として選び、北京大学で教鞭をとっていた魯迅に贈っている（雲岡石窟研究院の趙昆雨氏による）。そのころ魯迅は古代の文物に強い関心を寄せていたからである。澤村は帰国後まもなく夭折し、当時の記録類は散佚したが、インド石窟寺院をふくむ判のガラス乾板七六八枚だけは幸い当研究所の回収するところとなった。

このほか東亜同文会が創刊した中国語新聞「北京順天時報」照相部技師の平田饒や北京の東華照相材料行撮影部の外村太治郎らも一九二〇年ごろ雲岡石窟を撮

影した写真集を販売している。

わたしたち「北朝石窟寺院の研究」班では、東方文化研究所のスタッフが撮影した写真一万枚あまりを整理するとともに、これら一〇〇年前のガラス乾板や紙焼きをすべてデジタル化した。それを中国社会科学学院考古研究所と共同編集した『雲岡石窟』の中で使用したほか、班員相互の研究資料として利用している。北京山本照像館の写真については、すでに東京大学東洋文化研究所がデータベースを公開していることから、今後、どのような形でネットワークを構築していくのか、思案しているところである。

律（出家者の生活規則集）は門外不出か

船山 徹

研究班「中国在家の教理と経典」が二〇二〇年三月に終了する。中国の中世時代の仏教史における主要な典籍である『広弘明集』三十巻という仏教アンソロジーの一部をひたすら読み、現代語訳と語注を付ける作

業を行った。仏教の主要な教えや儒教・道教との関わり、僧侶や在家の社会的活動を記録する『広弘明集』の撰者は唐の道宣という出家僧。ひたすらに原文を読むことは、会読班と通称される東方部共同研究班のもつとも基盤的な活動である。人目を引く名目のプロジェクト型国際研究が喧伝される現代に背を向ける行為と受けとられかねないが、実際は全く逆である。前近代の思想や歴史文献を確と研究する基盤は、まず原典資料を唯ひたすら読み、我々の思考を原典の方にあわせ、当時の思想や歴史社会を知ること尽きる。ここから現代に適用可能な視点が浮かび上がる。若手研究者に本の読み方を伝えるにも、毎回の会読を通じて体で示すのが理に適う。楽しいか否かの問題でなく、読書は前近代文献研究の屋台骨である。因みに漢語の仏教文献はとても癖が強く、読みにくい。しかしどんなに読みにくかろうと、歴史的・思想的価値は計り知れず、影響は現代まで及んでいるから、前近代の漢語仏典を精読する意義は大きいと信じている。

とはいえ、本班では、唯ひたすら読むことのその先にあることを見据えて、原文を読むに当たって視点の一つ設けた。『広弘明集』には、在家信徒である皇族や知識人たちの書いた文章が豊富なので、当時の在家者たちが仏教に対して抱いていた思いを知るのに実

に貴重な一次資料である。そこで、在家信徒は仏教の何に惹かれたかを知ること、ひたすら読むことの更に先に掲げた。

具体的には、班名に示したように、中国中世のうちでも特に五七世紀頃の漢人在家仏教信者たちがとりわけ好んで読んだり引用したりする仏典は何だったか、そして、仏教の様々な教えの中で出家者とは異なつて在家者が重んじた教理や考え方や用語は何だったか、心懸けることを、班員共通の課題とした。

在家と出家の間の違いがあるとすれば、それは何かを問うことは、平たく言えば、出家と在家の違いを素人と専門家の違いのようなものと考えてよいかどうかである。仏典は寺に所蔵されたから、多くの仏教書を読んで理解しようとする者は、まず寺に行き、経蔵と呼ばれる仏教書庫に入る必要がある。しかし寺の経蔵に足を運ぶことは出家者にはもちろん可能だが、寺の外に住む在家者にはほとんどできない。また、仮に都の中であつても、都の寺すべてに経蔵があり、仏教書が完備しているわけではなかった。本の形態も木版や金属活字の印刷本でなく、卷子本と呼ばれる巻物が個別に存在するだけであつた。この意味で中国中世の仏典の保管状況は現在の図書館事情とは相当に異なつていた。在家には手の届かぬ仏教書がきつとあつたに違

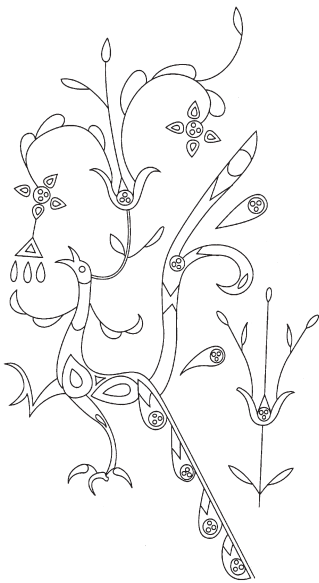
いない。とすれば、在家者が読めた仏教書には何か特徴や制限があつたのか。在家には読めない機密文書のような仏書もあつたのか。

隔週三時間の会読で扱える量は知れている。『広弘明集』全三十巻のうち、四年で読めたのは二十三巻と二十八巻の二巻に過ぎない。それ故、最終結論めいたことを言うのは憚られるが、ある程度の見通しは得られたように思う。

大別すると、仏教書は、スートラと呼ばれる「經典（お経、ブツダの直説）」と出家者専用の生活規則集である「律」とブツダ以後の仏教徒が論文として書いた「論」の三種からなる。このうち在家者の中でも裕福な皇族や知識人が特に有名な『法華経』『維摩経』『般若経』などの経や『太子瑞心本起経』というブツダの伝記を頻繁に引用するのは確かと言つてよい。それに対して、各經典の専門知識をもつ学僧が著した注釈の類いは、在家者の手に届くものではなかつたらしい。同様に抽象的理論を整理した「論」の場合も、在家の引用するものはかなり限られる。そして何より出家者専用の「律」は、在家者からもつとも縁遠い感触がある。律には出家者が戒律違反した時の罰則も具体的に明記するから、在家者に律を読ませてはならぬとの記録もある。性的な姪戒の場合は、体の部位に至る

まで極めて露骨な内容が書いてある。つまり出家者の生活実態や問題と直結する「律」は、在家者の目に触れさせてはならぬ、「部外者お断りの機密文書」であったような印象が会読から得られた。

こうした事柄に最終結論を下すには、『広弘明集』三十巻および関連諸文献を精読する必要がある。それを残された課題として、二〇二〇年四月から四年計画で研究班「中国在家の仏教観・唐道宣撰『広弘明集』を読む」を新たに立ち上げ、『広弘明集』の会読を更に推し進めることにしたい。



ある先輩の背中

——石立善さんへの詠

福谷 彬

目の前の課題をこなすのに精一杯。そうした状況は常勤になればきつと変わると学生時代は思っていたが、幸運に就職できた後もあまり変わらない。研究することが喜びで研究者を目指したはずだが、このままでは研究者であること自体が目的になってしまう。そんな焦りを感じる時、ある先輩の懐かしい声を思い出す。

「君は学問していて幸せか。僕は今心から幸せや。」

京都大学中国哲学史研究室の先輩で、上海師範大学教授になった石立善さんの言葉だ。石さんは「人文研は天国と呼ばれるところだぞ、君もそこを目指して頑張れ」と発破をかけてくれた人でもある。

筆者が石さんと出会ったとき、筆者は分属したばかりの学部生、石さんは課程博士論文提出を控えたODであった。精悍な風貌と熱血漢な性格は、義に厚い三國志演義の豪傑を彷彿とさせた。歳は十四も上だったが、ともに研究室では少数派の朱子学を学んでいたこ



石立善さん (Facebook より)

ともあって、いろいろと気にかけて頂いた。

早朝から深夜まで研究に明け暮れ、その合間に非常勤の仕事に出かけたかと思うと、また研究室に戻って深夜まで作業する。筆者の目に映った石さんの生活はまさに研究と一体。研究こそが人生だった。生活はけっして楽ではなかったはずだが、悲壮感は微塵もなかった。深夜の帰り道、遅めの夕食を一緒した折、好物のラーメンをすすりながら口にしていたのが右の言葉だった。

筆者の三学年以上の先輩で、石さんを尊敬していた先

輩に古勝亮さんがいた。亮さんは「脇目も振らず黙々と作業している石さんの背中をよく見ておけよ、俺たちもいつかこんな背中を後輩に見せられる研究者になるう。」と口にしていたものだ。

ある時、石さんは非常勤の勤め先の京都女子大学から研究室に戻ると、その日の講義での出来事を語ったことがあった。いつも熱心に教室前方の席で出席していた学生が後期になってからはずっと出席していないことに気がついたそうだ。気になって他の学生に尋ねたところ、その学生はすでに病で亡くなった、前期に出席していたのも病身を押し本人の強い希望で出席していた、とのことだったという。「僕は彼女からね、学問とは何かを教えられたよ。単位のためではないし、生活のためでもない。もっと知りたい、学びたいから勉強することだよ。」と眼を真っ赤にして声を震わせながら石さんは語っていた。

このように、石さんは意欲ある学生をいつも大切に思っつて情熱をもつて接しておられたが、日本の学界やその権威に対しては常に厳しい目を向けていた。「日本の研究者は本が読めていない」「恵まれた研究環境を生かせていない」「過去の栄光にとらわれて、現在の状況を客観視できていない」というように。しかし同時に石さんは日本の学術に対する誰よりも深い理解

者、愛好者でもあった。石さんは帰国後、日本の優れた東洋学研究を中国へ紹介し、また日本に伝存する経書の古写本の価値を指摘されてきた。二〇一六年には『日本十三経文献集成』、二〇一八年には水上雅晴先生とともに『日本漢学珍稀文献集成』を創刊した。残念ながら、前者は目下のところ加藤虎之亮『周礼経注疏音義校勘記』が出版されるのみだが、編者である石さんの壮大な計画とこの仕事に向けられた熱意は格調高い古典漢文で記された総序に示されている。後者も第一集「年号部」が世に出るに留まるが、令和改元の節目に当たって、元号制定にかかわる博士家に伝わる貴重な典籍を影印し、詳細な解題付きで中国に紹介した。また、「胡適与入矢義高—写在書簡上的中日学術交渉史—」（『東亜視覚下的近代中国』所収、二〇〇六）では、人文研の教授でもあった入矢義高と胡適との敦煌写本をめぐる学術交流の意義を論じ、「山高く石裂く—私の知っている柳田聖山先生—」（『柳田聖山先生追悼記念文集』所収、二〇〇九）では、同じく人文研の所長であった柳田聖山と面会した時の思い出を感慨深く生き生きと描いている。二〇一七年三月から八月にかけては人文研に客員研究員として滞在されていた。朱子学方面では、日本に伝存する『朱子語類』の異本である朝鮮古写徽州本『朱子語類』の重要性をいち

早く見抜き、「朝鮮古写徽州本朱子語類について」(『日本中国学会報』第六〇集所収、二〇〇八)では、厳密な考証によってこの古写本の底本が淳祐十二年(一一五二)の徽州刊本の魏克憲寶祐二年手校本であることを指摘した。もともと石さんはこの研究に対する日本の朱子学研究者からの反応が乏しいことに不満を漏らしていた。石さんがこの後、朱子学から文献学へと活躍の場を移されたのはそのことと無関係ではなからう。「思想はアイデア勝負だが、文献学は実力勝負の世界。自分は実力で戦いたい」と語っておられた。先日、松野敏之先生の「朝鮮古写徽州本『朱子語類』編纂考」(『朱子学とその展開—土田健次郎退官記念論集—』所収、二〇二〇)で、石さんの徽州本『朱子語類』に対する考証が正鵠を射ていたことが指摘されているのを目にした。ようやく日本でも石さんの研究成果が正当に評価されるようになったと感じた。

石さんは齒に衣着せない言動によって人と衝突することが少なくなかった。帰国の前、石さんはこう語っていた。「中嶋敦の『弟子』は知っているよな。僕はね、孔子にとつての子踏みたいな存在になりたかったんだよ。納得できないと思ったことは師匠に対してはつきり口にする弟子。孔子はそんな弟子を大事に思ってくれたんだけどな。」苦笑いを浮かべる石さんの

姿は、既に上海師範大学への就職が決まって周囲は祝賀ムードだったにも関わらず、どこか寂し気であった。筆者が石さんの思い出を記すのは本稿で二度目だ。一度目は、二〇一九年三月に拙著『南宋道学の展開』を出版した際に「あとがき」で影響を受けた先輩として石さんのことに触れた。石さんに送ったところ喜んでもらえて、ウェブ上でも本を紹介して頂けた。同年の十一月十八日、石さんから昔書いた宋学関係の論文を送るから感想を聞かせてくれ、と連絡があった。論文は十二年も以前のものだった。どうして今頃急に、と思い、すぐに感想を送らなかつたことを今も悔やんでいる。

それからちようど一ヶ月後のことだった。中国哲学史研究室の忘年会に出席中のこと、突如としてSNS上で石立善逝去の情報が飛び交った。最初は悪質なデマを疑ったが、病気で入院中だったという情報があり、つい先日の石さんからの突然の連絡のことが思い出され啞然とした。

「天道是非か」とは、使い古された悲嘆の辞だ。思い返せば、石さんが敬愛した岡山大学名誉教授の木下鉄矢先生が亡くなった時も、石さんを尊敬した古藤亮さんが亡くなった時も、そこには石さんがいて涙を流していた。そして今度はその石さんが世を去ってし

まった。

現在、コロナ・ウイルスの流行によって日本社会全体が大きな混乱にさらされている令和二年三月。困難な状況に決して左右されず、いつも楽しそうに学問に打ち込んでいた石さんに思いを馳せる。「心から幸せ」と口にしていた石さんの背中はまだ遠そうだ。

「コロナ危機」とコンピュータ 機械化資本主義的生産様式の前 史の終わりについて

クナウト・ティル

[It is the end of the world as we know it,
and I feel fine]

R. E. M. Document, 1987

二〇二〇年が明け、新型コロナウイルスが中国の武漢で勃発して以来、私たちがこれまで知っていた世界は終わったという危機感を抱く人がいるかもしれない。社会全体、国家の感染防止措置によって「要請」さ

れる自宅待機は、人々の社会的な配置を変えつつある。また、ヨーロッパでは、風邪の際に医療用フェイスマスクを着用する日本の習慣が浸透しはじめた。

しかし、これらの変化は「世界の終わり」とはほど遠い。結論を先取りすれば、終わりをもたらした変化とはコンピュータ化である。すでに可視化されるほどその相貌をあらわにしはじめ、私たちが住む世界を大きく変えた。

「コロナ危機」は単なる世界的なパンデミックに止まらず、地域の隅々まで浸透している。ウイルスは社会的に弱い立場にある人々にとっては健康上の脅威である。老人ホームや福祉支援施設の住人に感染すれば、致命的な状況にいたる。

また、この危機は一九三〇年代の世界経済恐慌を超えるという予測もある。ドイツは二〇〇八年以降好景気だったが、二〇二〇年度第一四半期に十パーセントの景気縮小を経験した。米国では、四月十日までに千七百万人が新失業者として登録し、一九三〇年代の二千万人以上に近づいた。中国政府のデータによると、二〇一九年の中国経済の成長率はわずか六パーセントで、一九九〇年以來の最低値である。

同時に、航空交通や諸国の検疫措置による混乱状態は、貿易に衝撃を与えた。中国から日本への野菜輸出

は、二〇一九年四月に比べて六十パーセント以上減った。今や世界中のエコ意識の高い消費者たちは地産地消で食料を買えるようになる喜びかもしれないが、他方で食料価格が急激に上昇する可能性がある。この結果、顧客が継続的に失われ、サービス業や小自営業者に影響がおよぶ。したがって、「コロナ危機」は、世界的な資本主義生産様式の危機だと考えられる。

しかし、すでに危機の勝者がいる。二〇二〇年三月中旬、アマゾンは何万人の労働者を募集すると発表した。これまでほとんど知られていなかったソフトウェア会社は、ビデオ通信ソフトウェア（ズーム）で大きな成功を収め、クラウドサービスが一層推し進められた。大学は「オンライン授業」を提供しはじめ、今後、高等教育機関が提供する特別な知的価値を利用するためのビジネス・モデルが開発されるかもしれない。

これらのアネクトドトとは別に、三つの大きな傾向が現れてきた。

- 「テレワーキング」によるソーシャル（全社会的な）・オフィス・オートメーション
- コンピュータ化されたソーシヤルコントロール（監視）を個人に拡張
- 農・工場から直接消費財をもたらす商品のネットワークの普及

原則として、ポイント1と2は関連しているが、最初に第3の点から言及したい。

アマゾンなどの主要サプライヤーによるネットワーク商品の配送の拡大は、これまでの消費制度に変更をもたらし、その潜在的な影響をはかるには長期的な検証が必要である。また、社会全体での消費財の流通は、貯蔵・輸送コストを削減する合理化策として理解されるべきである。これは長期的に見れば、仲介者としての小売業者が消失することを意味する。アマゾンで靴を注文した場合、靴の小売業者と靴のチェーン（靴の小売業者はすでに依存していた関係で）は、すぐに消える。これは中産階級の大部分と関わる社会的な衰退をもたらすことになるが、その政治的結果を予見することはむずかしい。

「コロナ危機」のもう一つの効果は、「テレワーク」や「ホームオフィス」が社会全体に拡張することである。テレワークとは、事務員が自宅のインフラを使用して、義務付けられている賃労働を実行することを意味する。つまり、自前のコンピュータを使用して、自らの賃金で借りた住宅のインフラ（トイレからコーヒーマシン、インターネット接続まで）を用いて労働時間を過ごすことである。

賃労働者は「自主自由」に働くことで、会社による

物理的な統制を回避してきた。しかし、今後、会社はテレワークによる労働とその時間をほとんど制御できないため、生産額を統制する「出来高給」に切り替えていく可能性がある。それにより、自主労働は自己管理の、搾取は自己搾取の形を取るようになるだろう。

この方法は、インターネットワーカーがクリックごとに少額を受け取るアマゾンのオンライン商品の「カスタマーレビュー」など、いわゆる「マイクロワーク」ですでにテストされている。

テレワークの普及に関連するもう一つの側面は、新型コロナウイルス対策という名目での社会統制の延長である。ヨーロッパでは公共の場所でのビデオ監視は広く行われてきた。中華人民共和国をモデルとする全国的な人工知能ビデオ監視システムはわずか半年前には想像すらできないものだったが、現在は、ベルギー警察が人々の自由な移動禁止に違反する行為を防ぐために、エアドローンで公園を監視している。韓国では、インターネットユーザーは誰でも、自分の周囲に感染者がいるかどうかを簡単に確認することができる。シンガポールの警察は現在、携帯電話をデジタルな足枷に変えた。これらの措置は、世界的なパンデミックのない時期に「オーウェルの」と形容された。このような体制内の人々の監視と統制は、労働の組織化と直接

かかわる。サイバネティクスでは、このアプローチは「通信」(communication)と「統制」(control)、すなわち人間社会のような複雑なシステムを支配することと呼ばれる。

これらの変更はすべて目新しいものではない。コロナウイルスと「世界経済」の危機が同期して現れるので、社会全体を抱えるその革命的な変化は形式ではまだ認められないのに、その本質が歴史的に露出してきたと考えられる。

私の現在の研究は、日本における情報化の社会史である。そのアプローチは、有機体的な「工場」の器官としての「コンピュータ」の生産手段の普及、すなわち物質生産の場所は天然物質の変換によって行われることを把握することである。

第二次世界大戦後の日本では、社会の完全なコンピュータ化の先史時代が実現したという印象がある。例えば、一九五九年に日本国有鉄道による最初のコンピュータネットワークの拡大で表現され、指定席予約が自動化された。このネットワークは、鉄道全般の自動化と同様に、サイバネティックな観点から運用され、非常に成功した変革の一例である。

もう一つの側面は、個々のコンピュータの発明であり、マイコン(ホームコンピュータ)およびパーソナ

ルコンピュータとしての形態である。一九八〇年代、普遍的な知能道具では貫徹できなかった「テレ教育」のためのマイコンは、初めてテレワークを可能にした。同時に、京都大学の学生たちは、互換性のない複数のマイコンを接続した日本初のマイコン・ネットワークを作った。これは学生プロジェクトだったが、特にプログラムやデータを交換して、「民主主義的」なコンピュータのソーシャルネットワークに関心が集まっていた。同時的なオペレーティングシステムとハードウェアの無互換性を超えて、プログラムする能力を待たない、技術能力を理解しないユーザーは、この「端末」使用することができるという考え方を築いた（今のスマートフォン、タブレット端末として実践化）。

また、インターネットのSNS以前、一九八〇年代後半には、愛好家が草の根掲示板システム（草の根BBS）を運用しはじめた。同時、これは主に「ソーシャルネットワーク」の趣味な形で存在したが、BBSとその消費者生成メディアに基づく機能はテレワークのための直接的なモデルを提供していた。

今日、我々は、製造業時代が終わる一九世紀に比類しうる時代に立っているといえるのではなかるうか。イギリスの資本主義的生産様式の始まりに言及した『資本論』第一巻で、マルクスは次のように語る。

「斯くしてマニユファクチャの中に、大工業の直接的な技術的な基礎が見られることになるのである。最初に大工業の採用された生産部面に於いて、手工業的及びマニユファクチャ的営業を廃絶せしめた機械は、マニユファクチャに依って生産されたものである。機械営業は斯くの如く不相応な物質的基礎の上に原生したものであって、それが一定の発達段階に達したとき、本来完成された形で見出され、後に旧来の形態を以って更らに完成されたこの基礎を殲滅して、それ自身の生産方法に相応した新たな基礎を造り出さねばならぬようになる。」

二〇二〇年は、私たちが「知っているような世界の終わり」ではない。過去の世界から長い間存在してきた基盤の「変革」が訪れる時であり、それが待望される世界が誕生する時でもある。これまでの生産活動を「廃絶せしめた機械」としてのコンピュータによる変革は経済的下部構造を変革するに過ぎない。生産のグローバルな経済的基盤が変われば、政治システムの大規模な変化はそう遠くなく到来する。私たちは、あまりにも長い間、その中でいたため、「快適に感じる」かもしれないが、その先の世界はすぐそこにあるのである。

京都、二〇二〇年四月一三日

注

- 1 ドイツ語原文は「Umwälzen」=「変革」
- 2 マルクス著、高島素之訳「資本論 第一巻 第一冊」改造社、一九二七、三六二頁。

史語所の概要と私の研究生生活

倉本尚徳

私は二〇一四年四月から二〇一九年三月までの約五年間、台北にある中央研究院歴史語言研究所（史語所）にて助研究員として奉職した。助研究員は、台湾の大学の助理教授に相当する専任の研究職である。今後訪問される方々のために、史語所の概要をその建物を中心にして、自身の関わった範囲内で簡単に紹介させていたきたい。

贅言を要しないだろうが、史語所は中国史研究の長い伝統を有する世界的に有名な研究所である。研究員

は歴史・人類・考古・文字という四学門のいずれかに所属し、各学門の召集人が人事・行政・学術に関して様々なリーダーシップをとる。時代別では秦漢や明清史の研究者が多い。また、共同研究も盛んであり、文化思想史・台湾と東南アジア考古学・文物画像・礼俗宗教・生命医療史・法律史・世界史・古代文明・デジタル人文学という九つの研究室、明清檔案・漢籍資料庫・地理情報システム・金文・安陽という五つの工作室、科技考古・文物保護の二つの実験室を設置し、多くの助手がいて運営を補助している。史語所にも世代交代の波が押し寄せ、欧米の学問の影響を受け随分と様相が変わっており、近年は医療史・世界史・デジタル人文学など新しい学問分野に重点が置かれる。

史語所の建物は主に歴史文物陳列館（文物館と略称される）、研究大樓、傅斯年圖書館、考古館から構成される。研究員の多くは文物館の六・七階か研究大樓に個人の研究室を構える。訪問学者やポストドクも主に文物館の六階に共同研究室が提供される。研究大樓の五階には数位文化中心（デジタル文化センター）が入っており、史語所と共同で様々なデジタル人文プロジェクトが推進されている。

文物館の五階には所長室や事務会議を行う会議室・秘書室・事務室・会計室など、史語所の運営にかかわ

る室が集中している。専任の研究者の数は人文研とそれほど変わらないが、職員や助手の数は圧倒的に多く、研究員の事務負担の軽減に務めている。日本では教授会での人事に関わる最終投票は形式的になることが多いかもしれないが、史語所の所務会議では新規の研究員を採用する人事に関して、最終投票直前に白熱した議論が交わされることがよくあり、その議論内容によって投票結果が左右されることもあった。

史語所では様々な国際学術会議や各研究室が主催する講演会が頻繁に開催される他、隔週に一回、順番に所内の研究員が研究成果を報告する講演会が文物館五階の会議室で開かれる。全員が報告するため、担当がまわってくるのは二年に一回ほどであるが、論文原稿を前の週にあらかじめ提出する必要がある。所内外の研究者から様々な批判や意見をいただくのは大変よい機会であった。

文物館の一〜二階部分は博物館になっており、水・土・日曜が開館日で、無料で一般公開されており、写真撮影も可能である。殷周の甲骨・青銅器、漢代の木簡・竹簡、石刻拓本、明清の檔案など、貴重な文物を大量に蔵し、「小故宮」とも呼ばれている。特筆すべきことに、これら所蔵品は史語所の研究と密接に関連しており、詳細なデータベース（史語所数位典藏資料

庫整合系統）が構築され、不断に情報を更新し新たな研究成果が生み出されている。なお博物館を訪問するなら、史語所の近くにある胡適紀念館も忘れず是非訪問していただきたい。詳細な展示がなされており、近代史のよい学びになるだろう。

文物館の地下は、展示会なども開催できる広い空間が中心を占め、昼休みにはここで毎週ヨガ教室などが開催される。また、史語所に関わりある人間が百人以上も参加する毎年恒例の「春酒」（春節開けの大宴会）がここで開催されることもある。このほか地下には、講演会場やトレーニングルーム、卓球場、厨房、さらにシャワー室までもある。

最後になるが、研究面で最もお世話になったのは、初代所長の名を冠した傅斯年図書館である。平日のみの開館だが、一般の者でも利用可能で、和書も含めた外国語の書籍も豊富である。なお、傅斯年図書館の奥には原則所内の人間しか入ることのできない善本貴重書などの特別室がいくつもあり、その一つに拓本室もある。私は月に二回のペースで開催される仏教石刻拓本研究会に参加した。実際に拓本を見て参加者全員で文字を読み取っていくのである。また、私の希望で同じメンバーで『統高僧伝』の読書会を組織させていただいた。これらの機会は自身の研究にとっても新たな

発見がたくさんあり、大変貴重な経験となった。

以上、自身のかかわった範囲で、史語所の建物を中心にその概要を説明した。個人的には、黄進興・王明珂の前所長や、専門分野が重なる顔娟英・劉淑芬の両先生には格別なご厚誼を賜り感謝してもしつくない。他にも私が所属した歴史学門の召集人であった張谷銘先生、副研究員の内田純子先生や読書会のメンバー、秘書の張秀芬女史をはじめとした職員の方々に生活面を含め何かと助けていただいた。この場をお借りして史語所の皆様に重ねて御礼申し上げたい。

今井漆さんと『天官書』

平岡隆二

今井漆（いたる、一九〇六一—一九九〇）さんが一九五〇年代にガリ版刷りで刊行した私家論文集『天官書』は、二〇世紀の京都で行われた科学史研究のなかでも、もっとも個性的でしかも画期的な成果だと思う。わたしがこれまで目にする事ができた計二十六輯

（ただし第七・二五輯は欠）は、総計七百頁を超え、収録論文七七本は、ほぼすべて今井さん自身の論文である。ただし各論文には著者名すら記さないことが多い。すべて自分でガリ切りして印刷・配布していたらしいから、これは公的な業績をねらったものというより、私的な同人誌と呼ぶべきかもしれない。実際今井さんはこれをごく一部の研究者にしか配らなかつたらしく、公共図書館にはほとんど収蔵がないため、かつては入手に困難をきわめた。しかし今は、今井さんの旧蔵書を架蔵する国立天文台が全文PDFをネットで無料公開してくれていて、容易にアクセスすることができる（<http://library.nao.ac.jp/kichou/imal.html>）。まことにありがたいかぎりである。

しかしこの『天官書』を貴重なものとしているのは、なによりも個々の論文の卓越した学術性にある。おもな主題は前近代の数理科学史だが、中国・日本を中心とする東アジアと、ギリシャ・ローマ、イスラーム、中近世ヨーロッパ間の科学交流について、解明した新知見は数知れない。その仕事は、当時まだ黎明期の科学史学において独自の学風を確立しており、その成果を同人誌で発表したこととあわせて、驚嘆を禁じ得ない。

わたしが『天官書』とはじめて出会ったのは、博士

論文のテーマを西洋ルネサンス天文学から、イエズス会布教を通じた東西天文学交流に変更しようとしていた二〇〇二年頃だった。難解な漢文・アラビア語・ラテン語・ポルトガル語・オランダ語文献の海を自在に遊び、テキストに秘められた文明交渉の痕跡を、豊富な古典語の知識と数理分析によってあざやかに浮かび上がらせる手法に衝撃をうけ、限りなくあこがれた。

わたしが初めて英語で書いた論文は、今井さんの仕事の継承・発展を意識したものだ。その後何本かの論文を積み重ねて博士論文にまとめることができたのも、今井さんというすぐれたパイオニアがいてくれたおかげである。そんな話を、生前の今井さんを知る京都の先生にしたところ、藪内清先生にとっても今井さんの仕事はインスピレーションの源泉で、非常に高く評価しておられた、と教えてもらった。自分が褒められたわけでもないのに、なんだか嬉しかったことを覚えている。

今井さんは人文研の報告書『明清時代の科学技術史』（一九七〇）にも寄稿しているが、科学史研究班との関わりは東方文化研究所時代までさかのぼる。一九三三年から上海自然科学研究所の助手（のちに技術員）として中国各地で天体・地磁気観測を行った今井さんは、その頃中国科学史の研究にもめりこんでい

た。一九四四年には病を得て帰国するが、一九四六年にはその成果をまとめた著書『中国物理雑識』を東方学術協会の叢誌として刊行しており、その出版には能田忠亮、藪内清、水野清一など研究所関係者からの援助を受けたと自序で謝意をのべている。

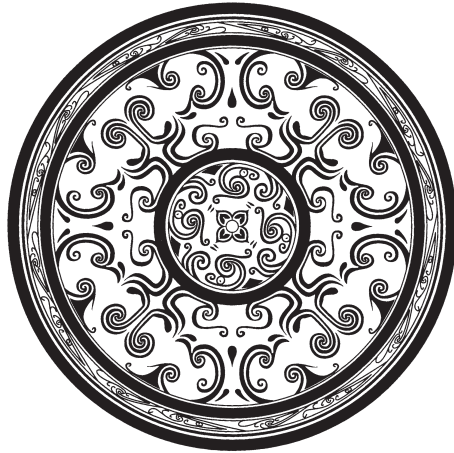
その後一九五一年に京大理学部上賀茂地学観測所の技官となり、定年まで勤めた。付設の官舎に住み込みで働いていた頃の日常は、毎夜零時頃に地震計の記録紙を交換した後、朝まで本を読んでいて、昼は寝ている「仙人みたいな人」だったという（竹本修三「上賀茂地学観測所時代の今井溱氏」）。

戦後に安定した研究環境を得た後、心血を注いで得た珠玉の成果を、毎夜ガリ版に切り続けた仙人のような今井さん。彼をこの仕事に駆り立てたものは、いったい何だったのか。『天官書』には何も記されていないが、それは前著『中国物理雑識』の自序で吐露される「中國に對するひたむきな愛」だったのかもしれない。

筆者個人の主観からすれば、「本書は」この十数年間に書き綴った戀文集でもある譯で、中國に對するひたむきな愛を現してゐる。筆者はこの空白な十年間、上海で此様な事に夢になつてゐた

譯で、何となく楽しく又何となく無責任な様で氣の引ける事である。しかし現在總べては過去の思ひ出となつて了つた。江南の四月、ウィルドの經緯儀にとまつたカササギも、測地テープでおひまはした黄蝶も、暖かつた背中の太陽の温度も、今は實は夢だつたのか、現だつたのか疑はれる。再びあれらの日々は歸つてくるだらうか。いま美しい現實には少しの保證も見出されない。唯だ上海で多數の歸化者を出してゐるといふ新聞記事に、何か或るチャンスをいつした様な、或るウラヤマしさを病牀で感じ涙ぐむのみである。しかし、自分はこの過去の過をのり越えなければならぬ。實現するかどうかは別としても、再び踏む中國への旅行準備を始めなければならない。

果たして中國への再踏査は實現したのだろうか。いずれ機会をみて調べてみたいと考えている。



浅原 達郎

命訓私読

曰古 三三三号 九月

殷高宗問於三寿韻読

曰古 三三三号 九月

沙丘

東方学報（京都） 九四冊 十二月

池田 さなえ

書評 飯塚一幸著『明治期の地方制度と名望家』

史林 一〇二巻五号 九月

愛され「やじ」の追悼文集

国史研究室通信 五九 十月

皇室財産と立憲政治―初期議會会期を中心として― 史学会編

『2019年史学会大会第117回大会プログラム』

史学会 十一月

〔報告〕 皇室財産と立憲政治―初期議會会期を中心として―

史学雑誌 一二九編一号 一月

第五章 山と生業 第一節 山の管理 一、御料林と地域

豊田市『新修豊田市史 資料編12 近代Ⅲ』豊田市 三月

池田 巧

書評 嘉戎語の絢爛たる接辞の構築を記述してその意味と機能
能を解析する『嘉戎語文法研究』 東方 四五八 四月
方言研究から見た現代中国⑥ 中国語の目で「令和」を見る

東亜 六二四 六月

方言研究から見た現代中国⑦ 何が違うから方言なのか

東亜 六二七 九月

方言研究から見た現代中国⑧ 方言の世界を守るために

東亜 六三〇 十二月

大谷大學所蔵本『呂蘇譯語』について

東方学報（京都） 九四冊 十二月

京大人文研90年の学知⑪ 歴史に翻弄 孤高の地域

京都新聞 三月一九日

石井 美保

●文化人類学の思考法（共編著） 世界思想社 四月

序論 世界を考える道具をつくろう（共著） 松村圭一郎・

中川理・石井美保編『文化人類学の思考法』 世界思想社 四月

現実と異世界―「かもしれない」領域のフィールドワーク

松村圭一郎・中川理・石井美保編『文化人類学の思考法』

世界思想社 四月

コラム 合理性論争 松村圭一郎・中川理・石井美保編『文

化人類学の思考法』 世界思想社 四月

●めぐりながれるものの人類学 青土社 六月

花をたむける

『ちやぶ白』 五号 十月

● *Modernity and Spirit Worship in India: An Anthropology of the Unmueli*. Routledge 十一月

あいづちと変身 河出書房新社編『わたしの外国語漂流記—未知なる言葉と格闘した25人の物語』 河出書房新社

ランドスケープの果ての野生 南條史生・アカデミーヒルズ編『人は明日どう生きるのか—未来像の更新』 NTT出版 二月

書評 猪瀬浩平著『分解者たち—見沼田んぼのほとりを生きる』 PRIME 四三号 三月

石川 禎 浩

天安門事件から三〇年／厳しい情報統制下での経済発展

Line Struggle. (共著) Christian SORACE et al. (eds.) *Aftershock of Chinese Communism*. Verso Press 六月

中国の歴史に暗い影／今も残る 朝日小学生新聞 六月四日

華北交通アーカイブ・戦時期広報用写真の研究データベース構築と社会の反応 (共著) 『情報処理学会研究報告』二〇一九 CH—二二—二二 七月

人文考 京大人文研創立九〇年 毛沢東の実像へ—加工された情報たどる 朝日新聞 七月二十四日

解説 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター編

刊『京都大学人文科学研究所蔵 鱗澤彰夫氏寄贈資料目録(書籍編)』 十一月

梁啓超と社会主義—一九〇三年訪米時の社会主義者との問答より 東方学報(京都) 九四冊 十二月

京大人文研九〇年の学知／誤った情報をもたらす悲喜劇 京都新聞 一月一六日

● 毛沢東に関する人文学的研究(編著) 京都大学人文科学研究所 二月

毛亡き後に神話を守る—遵義会議をめぐる文献学的考察 石川編『毛沢東に関する人文学的研究』 京都大学人文科学研究所 二月

● 「紅星」是怎样升起的一毛澤東早期形象研究 香港中文大学出版社 三月

伊藤 順 二

近社研の場所 谷川稔他編『越境する歴史家たちへ』 ミネルヴァ書房 六月

稲葉 稜

The Narratives on the Banmian Buddhist Remains in the Islamic Period. B. Auer and I. Strauch (eds.) *Encountering Buddhism and Islam in Premodern Central and South Asia*. De Gruyter. 九月

ガスナ朝は何をもって成立・滅亡とするのか教えてください 『歴史と地理 世界史の研究』二六一 十一月

イスラームとインドのフロンティア 千葉敏之編『1187年

巨大信仰圏の出現』（歴史の転換期4） 山川出版社

十二月

フロンティアと驚異―11、13世紀イスラーム文献におけるインドの表象を巡って―

東方学報（京都） 九四冊 十二月

稲本 泰生

十二面観音立像（旧宝慶寺石仏）奈良国立博物館蔵（表紙解説）

編集後記

宝物献納と布施行（正倉院宝物のはじまりと国家珍宝帳 正倉院学術シンポジウム二〇一一） 奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ 三』 思文閣出版

ポードガヤー出土の一〇〜十一世紀漢文石刻史料と訪天僧の奉献品 東方学報（京都） 九四冊 十二月

岩井 茂樹

●朝貢・海禁・互市―近世東アジアの貿易と秩序― 名古屋大学出版会

幕末期京都警衛における夫人足徴発

岩城 卓二

民衆史研究 九七号 五月

書評 藤本仁文著『將軍権力と近世国家』 日本史研究 六八六号 十月

中村家文書解題 河内国茨田郡大枝村中村家文書目録 守口 市 二月

●博物館と文化財の危機（共編） 人文書院

堀家文書史料解題 堀家文書史料調査目録 津和野町 三月

石見幕領におけるたたら製鉄と地域社会―播磨のたたら製鉄研究に向けて― ひょうご歴史研究室紀要 五号 三月

ウイッテルン・クリステリアン

《景德傳燈錄》から《五燈會元》へ―禪宗の変遷と燈史の編集

王寺 賢太 東方学報（京都） 第94冊 十二月

Par-delà la volonté générale: le "concert de volontés" selon le dernier Diderot. Marie Leca-Tsimonis et Ann Thomson (éd.), *Diderot et la politique, aujourd'hui*. Société Diderot 五月

L'utopie barrée: à propos des missions jésuites du Paraguay d'après *l'Histoire des deux Indes*. Lise Andries et Marc-André Bernier (éd.), *L'Àvenir des Lumières/The Future of the Enlightenment*. Hermann 七月

「68年」から現在を問う 京都新聞 七月一六日

岡田 暁生

●音楽と出会う 世界思想社
芸術史の妙味 藤原辰史編『歴史書の愉悅』 ナカニシヤ 四月

グリッド空間とバイロイトとルイジ・ノーノの墓と 現代思想
想2020年臨時増刊号『磯崎新』 二月

「音」と「音楽」は同じではない―文と理の融合できない壁
について 山際寿一・村瀬雅俊・西平直編『未来創生学の
展望』 三月

岡村秀典

探検大学のバイオニアたち―長廣敏雄著『雲岡日記』から

人文 六六号 六月

王莽鏡論

東方学報(京都) 九四冊 十二月

翻訳 許宏「中国古都の恒と変―古代の城郭配置を中心とし
て」 東方学 一三九輯 一月

籠谷直人

The Asian Merchant's Networks and Japan's Trade Re-
covery from the Great Depression in the 1930S. Choi
Chi-cheung (eds.) *Chinese and Indian merchants in
modern Asia: networking businesses and formation of
regional economy*. Brill 十一月

菊地 暁

文化的景観 山下晋司他編『観光の事典』朝倉書店 四月
趣旨説明と若干の補足(小特集:高取正男を読みなおす―ワ
タクシの生理と神道の成立―) 人文学報 一一三 四月

生業のヴァラエティとストラテジー―「照葉樹林文化論」の

故郷から― 早稲田大学理工学創造理工学院中谷礼仁研究
室編『千年村プロジェクト2018年度中国雲南少数民族村落
調査報告書』千年村プロジェクト 四月

考現学、その方法的連鎖をめぐる断章―破門、生態学、小鳥
居― 現代思想 四七/九 七月

文化資源…デジタルになること/オープンであること

日本民俗学 三〇〇 十一月

書誌紹介…田中緑紅著『緑紅叢書』復刻版

日本民俗学 三〇〇 十一月

●ライフヒストリーレポート選 二〇一九(編著)

京都大学民俗学研究会 一二月

●記念誌 重信幸彦先生還暦記念 日本民俗学講習会(共編
著) 三月

クナウト・テイル

Japan at the Crossroads: Conflict and Compromise after
Anpo, by Nick Kapur. Cambridge: Harvard University
Press, 2018. *Social Science Japan Journal* 24(2). Oxford
University 九月

Der Aufsatz *Ima, kô kangaru. Onaru koto no nai tatukai
toshite teiki sareta Tōdai tsō no honshitsu o, issai no
kyozō o hai-shite toi-naosu* [Jetzt denken wir so. Die
Frage nach dem Wesen des Tōdai-Kampfes, der als ein
endloser Kampf hinterfragt wurde, neu stellen, indem

- alle falschen Darstellungen verworfen werden] des Studentenaktivisten Yamamoto Yoshitaka (1969). Anke SCHEERER, Katja SCHMIDTPOTT (eds.) *Wege zur japanischen Geschichte. Quellen aus dem 10. bis 21. Jahrhundert in deutscher Übersetzung. Festschrift für Regine Mathias anlässlich ihres 65. Geburtstags. Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens 2020* (148). Hamburg University 十一月
- 1970年代の新左翼におけるマイノリティ解放論と部落解放運動 部落解放論研究会・京大科研「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的差別」共催 部落解放論研究会第二七回報告 部落解放論研究会 ウェブ 三月
- A farewell to class: the Japanese New Left, the colonial landscape of Kamagasaki and the Anti-Japanese Front (1970-1975). *Journal of Japanese Studies* 46(2). University of Washington 三月
- 倉本尚徳
浄土教的蔵経洞 永信主編『少林寺与隋唐佛教』宗教文化出版社 十二月
- 弘福寺靈潤と西明寺道宣 印度學佛教學研究 六八卷二号 三月
- 古勝隆一 中国史料研究会会報 二号 八月
- 東豊書店の思い出 中国史料研究会会報 二号 八月
- 魏晉『莊子』注釈史における郭象の位置 東方学報(京都) 九四冊 十二月
- 茶壺の中の別天地 視る 五〇四号 二月
- 小関隆
「永遠の絶望」の先へ 谷川稔・川島昭夫・南直人・金澤周作編『越境する歴史家たちへ：近代社会史研究会』(1985-2018)からのオマージュ ミネルヴァ書房 六月
- 書評 ヒマラヤの硝煙・ウエイド・デイヴィス「沈黙の山嶺―第一次世界大戦とマロリーのエヴェレスト」 藤原辰史編『歴史書の愉悅』ナカニシヤ出版 七月
- 書評 David Cannadine, *Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906* ヴィクトリア朝文化研究 一七号 十一月
- 京大人文研90年の学知：第一次大戦、現代の起点に 京都新聞 一月二十九日
- アイルランド革命から「大戦後」を考える 九州歴史科学 四七号 二月
- 佐藤淳二
フーコーと表象のリミット(ラモアの甥)から(ルソー)へ 思想 九月
- 啓蒙のリミット 神話・文学・政治思想の狭間で 日本18世紀学会年報(34) 六月
- (68年)から人間の終わりを考える 王寺賢太・立木康介編

『68年5月』と私たち』

週刊読書人 四月

書評 2019年の収穫アンケート

週刊読書人 (3319) 十二月

書評 存在論的ルソー像に向けて

週刊読書人 (3318) 十二月

書評 沈黙するものたちへの「歴史」—キーワードとしての

「幼児期」

週刊読書人 (3309) 十月

白須裕之

漢字構造の代数的記述について—人文學における形式的思考

の一側面—

東方学報 (京都) 九四冊 十二月

瀬戸口 明久

環境史の過去・現在・未来 人間環境教育コースのあゆみと

将来 村山聡退職記念文集

二月

災害はいつから始まったか

京都新聞 九月一三日

高井 たかね

浅探江戸後期成書の有関中国宴席文化未刊著作 (摘要) 予

稿集『從中古到近代』写本与跨文化研究 国際学術研討

会—

八月

黄凶琬『看山閣集』閒筆にみる乾隆期の室内陳設

東方学報 (京都) 九四冊 十二月

高木博志

岩井忠熊先生の存在 機 三二七号 藤原書店 六月

明治維新と豊国神社の再興 杉本哲也編『シリーズ三都 京

都巻』東京大学出版会

七月

岩倉具視と伝統文化の創造 ACADEMIC GROOVE vol. 1:

SIGNAL 京都大学学術研究支援室

十一月

近代天皇制と「史実と神話」—代替わりに考える 世界 九

二九号 岩波書店

二月

京大人文研 九〇年の学知 京の雅 近現代社会の創出

京都新聞 二月二十日

●『博物館と文化財の危機』(共編)

人文書院 二月

人文考 京大人文研創立九〇年 史実と神話を峻別 人文学

の知を今こそ

朝日新聞 (夕刊) 三月二十五日

桑原武夫と人文学・そして京大人文研『桑原武夫の世界—福

井県ふるさと文学館「没後30年 桑原武夫展」の記録』京

都大学人文科学研究所

三月

高階 絵里加

パリ万国博覧会 (一九三七) 日本館の国名と色彩

須田記念視覚の現場 一号 七月

洋画家・夢二—『西海岸の裸婦』をめぐる— 生誕139年

記念 竹久夢二展

八月

美術評 日本経済新聞 (夕刊)

五月一〇日、七月五日、九月六日、一二月二〇日

竹 沢 泰 子

【第五回】なぜ、人は人を分類したがるの!? 京大×ほとぜろ コラボ企画「なぜ、人は○○なの!？」 ほとんど0円
大学 ウェブ 五月二十八日

「共同研究の話題」「学際的研究」で損すること、得すること
人文 第六六号 六月

●二〇一八年度 科研費成果報告書『人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究』 六月
人文考 京大人文研創立九〇周年 根強い人種神話 差別乗り越える英知 朝日新聞 八月二十八日

●Forum: Trans-Pacific Japanese Diaspora Art: Encounters and Envisions of Minor-Transnationalism. Yasuko TAKEZAWA and Laura KINA (eds.) *Amerasia Journal* 45(3). University of California 十二月
Introduction Trans-Pacific Japanese Diaspora Art: Encounters and Envisions of Minor-Transnationalism. Takezawa, Yasuko TAKEZAWA and Laura KINA (eds.) *Amerasia Journal* 45(3). University of California 十二月

Encounters with Transmigrants and a Navaho Chef: Yoko Inoue. Special issue Trans-Pacific Japanese Diaspora Art: Encounters and Envisions of Minor-Transnationalism. *Amerasia Journal* 45(3). University of California 十二月

●特集 人種主義・反人種主義の越境と転換 (共編著)

人文学報 第一一四号 京都大学人文科学研究所 十二月
はじめに (共著) 人文学報 第一一四号 十二月
明治期の地理教科書にみる人種・種・民族

あとがき 人文学報 第一一四号 十二月
人文学報 第一一四号 十二月

●環太平洋地域の移動と人種―統治から管理へ、遭遇から連帯へ (共編著) 京都大学学術出版会 一月

序論 (共著) 田辺明生・竹沢泰子・成田龍一編『環太平洋地域の移動と人種―統治から管理へ、遭遇から連帯へ』 京都大学学術出版会 一月

「ほぐく」「つなぐ」が生み出すマイナー・トランスナショナルリズム―井上葉子とジーン・シンの作品と語りから 田辺明生・竹沢泰子・成田龍一編『環太平洋地域の移動と人種―統治から管理へ、遭遇から連帯へ』 京都大学学術出版会 一月

How Discrimination Arises. KURN Bookshelves #3. Yasuko Takezawa. Kyoto University ウェブ 三月二三日

武 田 時 昌

中国古代の暦運説―数理と展開 水上雅晴編『年号と東アジア―改元の思想と文化―』 八木書店 四月

日本人の忘れもの 京都新聞 一月一日
福澤諭吉の科学啓蒙 町泉寿郎編『漢学と医学』(講座) 近代日本と漢学」第三巻) 戎光祥出版 二月
人日と臘日―年中行事の術数学的考察 水口幹記編『前近代

東アジアにおける〈術数文化〉(アジア遊学二四四) 勉誠出版 三月
解題『數内清著作集』第六卷 臨川書店 三月

立木 康介

ナラティブの亀裂、主体の揺れ―精神分析を忘れぬために

コンタクト・ゾーン 一一 八月

まなざし、鏡、窓―フーコーとラカンの『侍女たち』(上)

思想 二〇一九年第九号「未完のフーコー」 九月

まなざし、鏡、窓―フーコーとラカンの『侍女たち』(下)

思想 二〇一九年第一二号 一一月

対談 フロイトはいまだ読まれていない

週刊読書人 三三三二号 一月

Corps sans voix, crime silencieux ― quelques réflexions sur *L'Amante anglaise*. ZINBUN 50 三月

声なき身体、静かなる犯罪―『イギリスの愛人』に寄せて

森本淳生/シル・フィリップ編『マルグリット・デュラス

〈声〉の幻前 小説・戯曲・映画』水声社 三月

Du supplémentaire. Sainte Thérèse d'Avila dans ses jouissances. PSYCHANALYSE 45 三月

徳 永 悠

排日から排墨へ―一九二〇年代カリフォルニア州における人

種化経験の連鎖―田辺明生・竹沢泰子・成田龍一編『環

太平洋地域の移動と人種―統治から管理へ、遭遇から連帯

へ― 京都大学学術出版会

「メキシコ人問題」と移民メディア―1930年代ロサンゼルスにおける排外主義とメキシコ人移民の抵抗―
アメリカ史研究 四二号 八月

中西 竜也

普遍の追究 藤原辰史編『歴史書の愉悅』ナカニシヤ出版 七月

19世紀雲南の中国ムスリム学者、馬徳新の聖者崇拜批判

東方学報(京都) 九四冊 十二月

永田 知之

●理論と批評 古典中国の文学思潮 臨川書店 六月

京大人文研90年の学知「敦煌学」創始に大きな役割 多分

野の学者誘う資料群 京都新聞(朝刊) 八月一五日

中国文学批評史と近代の文学論―20世紀前半の通史を材料

に― 東方学報(京都) 九四冊 十二月

漢籍分類の変遷―近代日本における四部分類への「回帰」

U-PARL編『図書館がつなぐアジアの知―分類法から考

える』東京大学出版会 三月

平岡 隆二

●Special Issue: East-West Contacts and Scientific Culture

in Early Modern East Asia (共編) *Historia scientiarum*

29(1) 九月

Jesus and Western Clock in Japan's Christian Century

(1549-c.1650). *Journal of Jesuit Studies* 7(2) 一月

Printed Editions and Manuscripts of *Tianjing Huowen*.

Historia scientiarum 29(1) 九月

ジュネーブ天儀・17世紀日本の天文模型(共著)

洋学・洋学史学会研究年報 二六号 五月

『天経或問』の刊本と写本

科学史研究 第三期 五八卷一八九号 四月

福谷 彬

『朱子語類』卷一四一八訳注(11)(共訳) 京都府立大学学

術報告 人文 第七十一号 十二月

『通鑑綱目』研究の現状と『綱目』初稿の意義―呂祖謙『大

事記』に注目して― 東方学報(京都) 九四冊 十二月

『陳亮集・増訂本』抄訳(二)―「六経發題」「語孟發題」訳

注―(共訳)

論叢アシアの文化と思想 第二十八号 一月

福家 崇洋

宮崎家所蔵吉野作造書簡 吉野作造研究 一五号 四月

歴史家の黄昏時 人文 六六号 六月

『近代主義』との格闘 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』

藤原辰史編『歴史書の愉悅』ナカニシヤ出版 七月

書評 牧野邦昭『経済学者たちの日米開戦』

社会思想史研究 四三号 九月

寮「自治」考「責任ある自治」とは何か

京都大学新聞 二六二九号 九月

書評 米原謙『山川均』 図書新聞 三四一八号 十月

戦前日本「ファシズムへの転落」が、現代の私たちに教えて

くれること 現代ビジネス(WEB) 十二月

奈良のモダニズム 鉄道・歌劇・映画 2019 NARA-EUR-

ASIA Institute's Report 3 三月

養徳社の風景 2019 NARA-EURASIA Institute's Report

3 三月

養徳社の風景(一) EURO-NARASIA Q 一六号 三月

State Socialist Movement in Japan during the Early

1930s: Focusing on the Nazi Party and the "Fascism"

Debates. ZINBUN 50 三月

藤井 律之

北魏孝文帝の親征―徵発地域と動員兵数―

東方学報(京都) 九四冊 十二月

藤原 辰史

●農学と戦争(足達太郎、小塩海平と共著) 岩波書店 四月

『トラクターの世界史』前後

村落社会研究 二五巻二号 四月

画一的卒業式とナチズム(道草の雑想(三))

クレーン六月号 五月

書評 湯澤規子『7袋のポテトチップス』

北海道新聞 五月一二日

書評 アンドレ・ジョルジョ・オードリクル 『作ること使

うこと』山田慶兒訳 読売新聞 五月二六日

知性と品性 問われる対応(ナビゲート)

毎日新聞(夕刊) 五月一五日

(書評) ローベルト・ゲルヴァルト 『敗北者たち』

読売新聞 五月五日

日本精神史の試金石としてのパン

てんとう虫 五一巻五号 五月

●歴史書の愉悅(編著) ナカニシヤ出版

●分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考 青土社 六月

縁側のタバコ 大人ごはん 六月

「ファミコン」の代理(道草の雑想四)

クーヨン 七月号 六月

書評 瀧口政満 『樹の人』 読売新聞 六月一六日

給食に学ぶ「食」という人間の根源

書評 ユーリー・コスチャシヨフ 『創造された「故郷」』 建築ジャーナル 一二九一号 六月

読売新聞 六月二三日

書評 横山秀夫 『ノースライト』 読売新聞 六月二日

学校給食のマルチな役割(ナビゲート)

毎日新聞 六月一九日

トラクターの社会史(特集 農業機械の普及と文化)

農業食料工学会誌 八一卷四号 七月

ブロックと積み木(道草の雑想五)

植物考1 「植物性」について

クーヨン 八月号 七月

Web春秋 はるとあき 七月

自著自薦『食べるとはどういうことか』

月刊 NOSAI 七一巻七号 七月

もはや、どっしりとした城ではないから(リレーエッセイ

家族のかたち)

ちいさい、おおきい、よわい、つよい 一二四号 七月

19年上半期読書アンケート 図書新聞 七月二十日

(対談) 森健の現代をみる 農業、農政の現状と課題

毎日新聞 七月二七日

食品偽装と政治偽装(ナビゲート)

毎日新聞(夕刊) 七月二四日

書評 ジョアオ・ビール 『ヴィータ』

読売新聞 七月一四日

随想 給食の未来 TASC MONTHLY 五二三号 七月

臨床医・徳永進の言葉と実践 図書 八四七号 七月

二〇世紀の農業技術と戦争技術 歴史評論 八三二号 八月

演劇という愉しみ(道草の雑想六)

クーヨン 九月号 八月

書評 ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ち

よつとブルー』『私たちのテロル』 読売新聞 八月二五日

それでもなお言葉の力を(赤坂憲雄との往復書簡 言葉をも

みほぐす1) 図書 八四八号 八月

小林宙の宇宙 小林宙『タネの未来』 寄稿

家の光協会 九月

植物考2 植物的組織論 Web春秋 はるとあき 九月

書評 沈輝、長谷川由美子著『棚田の民 中国貴州省の苗族』 読売新聞 九月十五日

書評 李光平写真・文『満洲』に渡った朝鮮人たち』 読売新聞 九月八日

書評 大木毅『独ソ戦』 東京新聞 九月八日

「伝える」と「伝わる」(道草の雑想七) クーヨン 十月号 九月

小麦はいつからどのように食べられてきたの? いいね(クレヨンハウス) 四五号 九月

石内都×藤原辰史×伊藤比呂美 縛られた過去からの解放 すばる 十月号 四一卷十号 九月

書評 サーシャ・バッチャーニ『月下の犯罪 一九四五年三月、レヒニッツで起きたユダヤ人虐殺、そして或るハンガリー貴族の秘史』 読売新聞 十月二十七日

書評 磯崎敦仁『北朝鮮と観光』 読売新聞 十月十三日

書評 湯澤規子『胃袋の近代』 歴史と経済 二四五号 十月

書評 マーク・カーランスキー『ミルク進化論』 北海道新聞 十月二十七日

緑食論(4)―食を聴く ちやぶ台 五号 十月

歴史を書いてみませんか(道草の雑想八) クーヨン 十一月号 十月

標準語との距離感について(赤坂憲雄との往復書簡 言葉を

もみほぐす)

書評 レベッカ・M・ハージグ『脱毛の歴史 ムダ毛をめぐる社会・性・文化』 読売新聞 十月一六日

歴史の美化と孤独感(ナビゲート) 毎日新聞(夕刊) 十月二日

対談 駒込武×藤原辰史 京都大学でいま、何が起こっているのか―生きる場所と考える自由を求めて 世界十月号 九二五号 十月

リユックに本が入らない(書物逍遙) 究(ミネルヴァ書房) 一〇三号 十月

書評 私有されない希望―今福龍太『宮沢賢治 デクノボーの叡智』波(新潮社) 五三巻十号 十月

切なさの歴史学 前編 世界思想社 Webマガジン 十一月二九日

書評 アダム・トウーズ『ナチス 破壊の経済 上・下』 読売新聞 十一月二四日

高瀬川の記憶(道草の雑想九) クーヨン 十二月号 十一月三日

植物考3 世界に浸れない私たち Web春秋 はるとあき 十一月

分解者としての歴史学者 群像 七四巻一一号 十一月

科学技術と共存していくために―「身近なもの」から「深く」考える― 季刊くらしと協同 二〇一九冬号 三二号 十二月

書評 二〇一九年下半年読書アンケート

図書新聞 十二月二日

書評 中野耕太郎『20世紀アメリカの夢』

読売新聞 十二月一日

切なさの歴史学 後編

世界思想社 *SEC* マガジン 十二月一日

日米貿易協定は不平等条約 (ナビゲート)

毎日新聞 (夕刊) 十二月十一日

切なさの歴史学 中編

世界思想社 *web* マガジン 十二月六日

書評 L・ダヴィドフ、C・ホール『家族の命運 イングラ

ンド中産階級の男と女』

読売新聞 十二月八日

「よどみ」の力 (道草の雑想一〇)

クーヨン 一月号 十二月

対談 藤原辰史×津村記久子「とにかく、「分解」は面白い」

図書新聞 十二月七日

植物考4 植物の舞踏―ブローセルフエルトの『芸術と原形』

に寄せて

web 春秋 はるとあき 一月

「欠損なき人間」はいない！ 世界を「金継ぐ」方法 生産

東洋経済 ONLINE 一月

暗くとも明けない夜はない (ナビゲート)

毎日新聞 (夕刊) 一月二日

縁食論―飲み込まれる言葉と飲み込める食への『ポースケ』に寄せて (前編)

みななのシシマガジン 一月

縁食論―飲み込まれる言葉と飲み込める食への『ポースケ』に寄せて (後編)

みななのシシマガジン 一月

「人材」と「人間」のあいだ (道草の雑想一一)

クーヨン 二月号 一月

貧困と災害に強い給食

かながわ学校給食だより 一〇一号 一月

京都から見る日本政治の質 (ナビゲート)

毎日新聞 (夕刊) 二月二六日

育児と時間 (道草の雑想一二)

クーヨン 二月

農家が「はたらく」とはどういうことか

農業と経済 1・2月合併号 八六巻一号 二月

書評 石牟礼道子『あやとりの記』 WIRED 三五号 二月

村山聡に関する考察 人間環境教育コースのあゆみと将来 (村山聡退職記念文集)

クーヨン 三月

「愛情弁当論」批判 (道草の雑想一三)

現代思想 四八巻五号 三月

「規則正しいレイプ」と地球の危機

船山 徹

●仏教の聖者 臨川書店

覚盛願経『梵網経』下巻初探 覚盛上人御諱記念唐招提寺の

伝統と戒律 律宗戒学院 五月

●六朝隋唐佛教展開史 法藏館

Xiao Ziliang, Jonathan A. Silk (ed.) *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, vol. 1. Brill

●梵網経十重禁 唐招提寺

The Study of Chinese Buddhist Thought in Japan: "Sub-

六

commentary" and Its Japanese and Chinese Equivalents. *Acta Asiatica: Bulletin of The Institute of Eastern Culture* 117 九月

Translation, Transcription, and What Else?: Some Basic Characteristics of Chinese Buddhist Translation as a Cultural Contact between India and China, with Special Reference to Sanskrit *arya* and Chinese *sheng*. Birgit Kellner (ed.) *Buddhism and the Dynamics of Transculturality*. Mouton de Gruyter 十一月

文字検索のさらなる地平に向けて：文字列の散在的一致を網羅するために 下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方―仏教学から提起する次世代人文学のモデル』文学通信 十一月

謝靈運と南朝仏教 蔣義喬編『六朝文化と日本』謝靈運という視点から』(アジヤ遊学二四〇) 勉誠出版 十一月
衆生から有情へ、そして再び衆生へ―サンスクリット語 *sat-hva* 漢訳史 東方学報(京都) 九四冊 十二月 一月

●菩薩として生きる 臨川書店

古松 崇 志

●金・女真の歴史とユーラシア東方(共編) 勉誠出版 四月
金国(女真)の興亡とユーラシア東方情勢 古松崇志・白杵 勲・藤原崇人・武田和哉編『金・女真の歴史とユーラシア東方』 勉誠出版 四月

翻訳 趙永軍「金上京の考古学研究」古松崇志・白杵勲・藤原崇人・武田和哉編『金・女真の歴史とユーラシア東方』 勉誠出版 四月

李公麟「五馬図」との出会い 人文 六六号 六月
金国の正旦・聖節の儀礼と外国使節

●草原の制覇―大モンゴルまで(岩波新書シリーズ中国の歴史 ③) 岩波書店 十二月 三月

宮 紀 子

鶯の巢からアガサ・クリステイを眺めると

夏季公開講座 鶯の巢からアガサ・クリステイを眺めると 図書 八四四 四月
と 人文 六六 六月

The Amalgamated Map of the Great Ming Empire. Susan Whitfield (ed.) *Silk Roads: Peoples, Cultures, Landscapes*. Thames & Hudson 十月

『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜―外交使節の往来と歴史書の編纂(一)

東方学報(京都) 九四冊 十二月
諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』」に対する疑義 史苑 八〇巻一号 二月

宮 宅 潔

秦代の「徭」と「戌」―その字義をめぐって

「秦代出土文字史料の研究」班日P 四月
關於里耶秦簡⑧755-759簡與⑧1564簡的編聯 簡帛 一八輯 五月

書評 藤田勝久・関尾史郎「簡牘が描く中国古代の政治と社会」 日本秦漢史研究 二〇号 十一月

秦代徭役・兵役制度の再検討

岳麓書院所藏《亡律》題解 東方学報(京都) 九四冊 十二月

岳麓書院所藏簡《秦律令(壹)》訳注稿(三)〔暫定版〕(共著) 中国古代法律文献研究 一三輯 十二月
「秦代出土文字史料の研究」班日P 一月

向井 佑介

●監訳 陳政主編『埋もれた中国古代の海昏侯国(一)』 二十七日間の皇帝 劉賀 樹立社 四月

●監訳 陳政主編『埋もれた中国古代の海昏侯国(二)』 劉賀が残した宝物 樹立社 五月

●監訳 陳政主編『埋もれた中国古代の海昏侯国(三)』 二千年前の歴史をさぐる 樹立社 六月

図面の作法 人文 六六号 六月
中国における双塔伽藍の成立と展開 菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』 思文閣出版 七月

龍門石窟―破壊前の姿を探る 京都新聞 十月十七日
北魏興安二年舍利石函の図像学

東方学報(京都) 九四冊 十二月

●中国初期仏塔の研究 臨川書店

三月

村上 衛

アヘン問題／アヘン戦争／開港場・租界／アロー戦争 岡本隆司・箱田恵子編『ハンドブック近代中国外交史―明清交替から満洲事変まで』 ミネルヴァ書房 四月

書評 篠崎香織『プランカンの誕生―海峡植民地ペナンの華人と政治参加』 東南アジア―歴史と文化 四八号 五月
書評 梶谷懐『中国経済講義―統計の信頼性から成長のゆくえまで』 現代中国研究 四三号 七月

書評 小川道大『帝国後のインド―近世的発展のなかの植民地化』 史林 一〇二巻六号 十一月

洋銀と紋銀―開港直後の廈門における海関銀号問題を中心に 東方学報(京都) 九四冊 十二月
大躍進と日本人「知中派」―論壇における訪中者・中国研究者 石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 二月

守岡 知彦

漢字字体規範史データセット用従来型UI再生の試み 情処研報 2019-CH-120巻 二号 五月

漢字字体の包摂基準の衝突評価の試み 東洋学へのコンピュータ利用 第31回研究セミナー 七月
漢字字体規範史データセットと単字検索 日本語学会二〇一九年度秋季大会予稿集 十月

大字典データベースの CHSE との統合の試み

じんもんこん二〇一九論文集 十二月

漢字字体規範史データセット及びその CHSE との統合について
東方学報(京都) 九四冊 十二月

内容アドレスリングを用いた多粒度漢字構造情報表現の試み
情報処理学会論文誌 六十一巻 二号 二月

森本 淳生

翻訳 ウィリアム・マルクス オイディプスの墓―悲劇的な
らざる悲劇のために 水声社 六月

京大人文研九〇年の学知 環世界の人文学 生きる「営み」
問い直す 京都新聞 九月十九日

『若きパルク』とメルロ＝ポンティのヴァレリー講義
メルロ＝ポンティ研究 一二三号 十一月

●マルグリット・デュラス 〈声〉の幻前―小説・映画・戯曲
(共編) 水声社 三月

●Marguerite Duras, une voix fantôme: roman, théâtre, cinéma. (共編) Zinbun 50. 三月

●愛のディスクール―ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学(共編)
水声社 三月

矢木 毅

●朝鮮朝刑罰制度の研究 朋友書店 十月

朝鮮初期における兵制の改革―特に「甲士」設立の意図とそ
の変質について 東方学報(京都) 九四冊 十二月

安岡 孝一

広告の中のタイプライター: Columbia Bar-Lock No.6
三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月四日

人名用漢字の新字旧字:「以」と「巳」
三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一日

広告の中のタイプライター: Royal Typewriter No.5
三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一八日

人名用漢字の新字旧字:「祝」と「祝」
三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二五日

広告の中のタイプライター: Remington Junior
三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月九日

Universal Dependencies の拡張にもとづく古典中国語(漢
文)の直接構成鎖解析の試み 情報処理学会研究報告(漢
文) 2019-CH-120 『人文科学とコンピュータ』 No.1

人名用漢字の新字旧字:「呉」と「吳」
三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一日

広告の中のタイプライター: Adler 7
三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一六日

人名用漢字の新字旧字:「禎」と「禎」
三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二三日

丸善とタイプライター 学鑑 丸善創業一五〇周年記念特別
号 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月三〇日

広告の中のタイプライター: National Typewriter
三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月六日

人名用漢字の新字旧字・「駅」と「驛」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一三日

広告の中のタイプライター：Confidential Schreibrmaschine

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二〇日

人名用漢字の新字旧字・「謁」と「謁」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二七日

広告の中のタイプライター：Royal Quiet De Luxe

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月四日

人名用漢字の新字旧字・「却」と「卻」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一日

広告の中のタイプライター：Smith-Corona Silent 55

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一八日

人名用漢字の新字旧字・「齒」と「齒」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二五日

日本の人名用漢字と漢字コードの齟齬 東洋学へのコンピュータ利用 第三二回研究セミナー

七月二六日

広告の中のタイプライター：Olivetti M20

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月一日

人名用漢字の新字旧字・「条」と「條」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月八日

広告の中のタイプライター：Smith Premier No.4

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二二日

人名用漢字の新字旧字・「娛」と「娛」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二九日

常用漢字・人名用漢字の音訓とその衝突 第43回速記科学研

究会公開講演会

九月一日

広告の中のタイプライター：Garbell Portable No.1

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月五日

人名用漢字の新字旧字・「星」と「曇」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二二日

広告の中のタイプライター：Horton Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一九日

人名用漢字の新字旧字・「鷹」と「鷹」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二六日

広告の中のタイプライター：International Typewriter (Double Type-bar Model)

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月三日

人名用漢字の新字旧字・「歴」と「歷」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一〇日

広告の中のタイプライター：Maskelyne Typewriter No.3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一七日

人名用漢字の新字旧字・「郵」と「郵」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二四日

広告の中のタイプライター：Moya Visible No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月三一日

人名用漢字の新字旧字・「繡」と「繡」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月七日

広告の中のタイプライター：M・A・P No.3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月四日

漢文の文法 自動で解析

京都新聞 第49456号 十一月二日

人名用漢字の新字旧字：「肅」と「蕭」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二日

広告の中のタイプライター：Eagle Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二日

人名用漢字の新字旧字：「応」と「應」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月五日

Universal Dependencies Treebank of the Four Books in

Classical Chinese. DADH2019: 10th International Conference of Digital Archives and Digital Humanities

十二月

広告の中のタイプライター：Contin Modele A

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二日

漢日英 Universal Dependencies 平行コーパスとその差異

人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん二〇一九」論文集

十二月

人名用漢字の新字旧字：「踐」と「蹊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月一日

漢文の形態素解析・依存文法解析・直接構成鎖解析

東方学報（京都） 九四冊

広告の中のタイプライター：Remington Standard Typewriter Model 10

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二六日

人名用漢字の新字旧字：「説」と「說」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月九日

広告の中のタイプライター：Royal Typewriter No.10

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一六日

人名用漢字の新字旧字：「旧」と「舊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二三日

広告の中のタイプライター：Blickensderfer No.5

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月三〇日

人名用漢字の新字旧字：「新」と「新」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月六日

広告の中のタイプライター：Morkrum Printing Telegraph

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月一三日

人名用漢字の新字旧字：「教」と「教」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二〇日

広告の中のタイプライター：Royal Electress

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二七日

人名用漢字の新字旧字：「黒」と「黑」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月五日

漢文自動訓読ツール UD-Kundoku の開発 東洋学へのコン

ピュータ利用 第三二回研究セミナー 三月六日

広告の中のタイプライター：Empire Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二日

人名用漢字の新字旧字：「柵」と「柵」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一九日

広告の中のタイプライター：Teletype Model 15

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二六日

人

文

第六七号 二〇二〇年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品